

ありふれた（？）女神転生

はるまき

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もともとはカオスごちやまぜ転生に感銘を受けて作った作品ですが、あの世界とは関連はありません。

とある作品世界と女神転生世界の融合に翻弄される転生主人公です。

誤字、間違った表現などありましたらご指摘お願いいたします。

目次

第1話：うわさの○○	1
第2話：押入れの向こうは異界	9
第3話：トラブルは舞い降りた	14
第4話：男だ！燃えろ！	21
第5話：いい日旅立ち	27
第6話：あなたにあげたい	35
第7話：憎み切れないろくでなし	40
第8話：愛で殺したい	45
第9話：女になって出直せよ	49
第10話：体育祭危機一髪：	53
第11話：真夜中に消えた女	58
第12話：海が好き！	65
第13話：美しいおとめ座の少女	70
第14話：Drカオスの挑戦！	74
第15話：しんめがみてんせい・に？	78
第16話：MAC全滅？円盤は悪魔だった？	82
第17話：Level？	87
第18話：地中海に全員集合！	91
第19話：海賊と呼ばれた男	95
第20話：ESPERS LEGEND	100
第21話：変わりゆく世界	104
第22話：ボーイ ミーツ ガール	109
閑話	113
第23話：彼女がスーツに着替えたら	116

第24話：盗んだバイクで走り出す

第25話：バビロン計画

閑話2

第26話：新世紀開始？

最終話：神代

139 134 132 127 121

第1話：うわさの○○

まあ、自分がこんなことになるなんて思ってもみななかった。
転生。

いや、な○うや、カク○ムなんかでは一般的って言われても、現実
で起きないよね？

…起きたんだよなあ（溜息）。

切っ掛けは、テンプレなのかな？、死んだんだ。

「的、おい、的!! 返事をしてくれ!!」

って、気が付いたら物凄い形相のダンディなおっさんに覗き込まれ
てた。

その瞬間に、情報が頭に溢れた。

俺は、僕は、会社員で、高校生で、五十路越えて、入学直後で…

プツン

ブラックアウトした。

はい、現在進行形で混乱してます。

起きたら、何処かわからないが病室で、ダンディな父と、やたら美
魔女な母親といずれイケメンなシヨタ弟に全周囲から抱きしめられ
て居ます。

…どうして？

落ち着こう、自分の情報を、確認すべきだ。

俺は、令和4年に生きていた、波平さん世代。

これと言って特技があるわけでは無く、しがないブラック企業で働
いていて、独り身で、割引シールが貼られるのが細やかな楽しみだっ
た…所謂負け組だった。

不満を紛らわすため、痛飲して…ふらふらと道路にはみだして…
ヘッドライトの光しか覚えていない。

僕は、昭和であの方の容体が云々言われていた時の、世田谷で、あの程度、ホントにある程度の霊地を管理する家系に生まれた。

その修行で異界に潜っていた時、とてもクリティカルな一撃を食らった。

記憶してるのは、自分の喉に迫る、乱杭菌。

…なるほど、どっちも死んだな。

マテ、待てい、自分！

生きているから、生きている！…よね？

恐る恐るぺたぺたと自分の体を確認してみる。

…良かった。欠損なした部位は確認できる限りなさそうだと。
で。

重要な事があります。

メシア教、ガイア連合、葛葉、ヤタガラス。

ハクイ、知ってる人。手を挙げて…!!?

ヤバイ。

…この体の記憶がヤバすぎるんですが!?

女神転生世界ですか!?!

混乱で固まっていた時、病室のドアが、バンッと乱暴に開けられた。

「的君、大丈夫かい!?!」

大きな声で病室に飛び込んできたのは、やや小柄ながら引き締まった体躯をしていて、爽やかでいて暑苦しいという矛盾を併せ持った青年であった。

「玄、病室だぞ、静かにしろ!」

父が飛び込んできた青年に叱責する。

「しかし、所長!」

…ん?

「もう!大鳳さん、いきなり病室に入ったら駄目じゃないですか!」

「そうだよ、お兄ちゃん!」

青年に続いて病室に入ってくる妙齢の女性と、少女。

「し、しかし百子さん、かおりちゃん!」

「しかしも案山子もありません、もう少し常識を…」

…んん？

マテ、待って？

父の名は、諸星 弾。

悪魔憑き（デビルシフター）で、セブンと言う、魔界「光の国」に住む、人間に協力的な悪魔に「超越眼（ウルトラアイ）」という霊具でシフトする腕利きだった…が。

間熊 成人（まぐま せいじん）と言うダークサマナーが協力関係にあった大鳳流空手道場に襲撃をかけた時に、辛うじて跡取りの大鳳 玄を救助できたのだが、右膝を壊された上、呪いによりシフト出来なくなつたのだ。

そこで、身寄りがなくなつた、やはり悪魔憑きである玄を自身が長を務める霊能組織、表向きは探偵業で *M i s s i n g*（失せ物） *A c o r d i n g*（捜索） *C o n p a n y*（会社）と名称していて、裏は霊障に対処する *M o n s t e r*（怪異） *A t t a k*（攻撃） *C r e w*（隊）、通称 *M A C* へと誘うとともに、後継である俺の特訓を開始して…ああなつた訳だ。

なるほど？

成る程…。

分かつた。

…鬱になる女神転生と、ウルトラ最大の鬱のレオ混ざってる!?

あんまりにもあんまりな情報の奔流に、俺は、僕は、再び意識を手放した。

精密検査で異常なしの判断を受けて、次の日には退院した。

意識としては、“俺”のほうに統合された、と、言うか、2回目の生を受けた“俺”が、女神転生で言う所の魂の試練を乗り越えた扱いになり、主体となつたようだ。

まず、自分の事を確認…再確認？、した。

前にも述べたように、地方の零細霊能組織に生まれた、高校生。普通に分類される位の霊能の、そこらへんにいるモブ雑魚。まあ、鼻屑目に見て、両親の顔面偏差値を少々受け継いだ位か。

父、弾。ダンディ。

前述のごとく熟練の悪魔憑き…だったのが”膝に（呪いの）矢を受けて”状態。

母、アンヌ，美魔女（年齢？、ふふふふ…）。

何でも、父と共に除霊を潜り抜けた、回復寄りの異能者。現在専業主婦。

弟、零、愛らしいシヨタで、才能の塊。

多分（絶対に）、悪魔憑き（決定事項）。

…これ、円〇ワールドと事故ってますよね??

そこにどろっどろの女神転生を混ぜた世界…ハハ☆！（白目）

一心不乱に、退院までの間、スマホで色々と、全精力を傾けて検索した。

この、スマホ。

前世の記憶では、この時代ではあり得ない位のオーパーツである。

まあ、令和のそれに比べると、もつさりとしているのだが、開発に関わったとされるのが、ナカシマとステイブと言う人物らしい。

らしい、と言うのは、全くその本人に辿り着けないのだ。

…オカルト事案え…。

ハイ！無益な考察止め！

結果として、最悪ではないが、いつ崩れるかもしれない現状が認識できた。

幸いと言うか現状、メシア教は、一神教に於いて所謂カルトに分類されている。

まあ、そりゃそうだ。

世界を一旦リセットして、新しい世界にINしよう、って戯言、普通は肯けるはずが無い。

でも、そこに、火種を打ち込む事態が起きた。

オイルショック。

自分の生活が、何時でも崩れ得るかもしれないと言う事実。そこに。

ノストラダムスの大予言が、流行ってしまった。

MMRの某Kさんが、

「世界は滅びるんだ!!」

「「なんだってー!!」」

って言うくらいに恐怖した世界。

：徐々にメシア派、増えてるらしいんです（溜息）。

いや、ね？、前世だったら文句も言わないんですけどね、この糞現世では。

言霊ってね、昇華しちゃうんですよね…（ふっかゝい溜息）。

つまり、GP、爆上げ。

今までにない霊障事案が多発して、各地の零細霊能組織が次々に壊滅し、そこにメシアンが乗り込んで更なる混乱を齎しているのが最近の情勢の様だ。

日本はまだマシな様で、葛葉、ヤタガラス以外にも「禍学特捜隊」や「MAT（monster（化け物）attack（攻撃）team（隊）」、「TAC（terrible—monster（怪異）attack（攻撃）team（隊）」、「GUTS（ghostly（幽霊的な）unrealistic（非現実の）task（事象に）quad（対処する）」etc、の地方組織が何とか崩壊を食い止めているようだ。

因みに親父が若い時に属していた組織は、すでに壊滅しているとの事。

実に、メガテン世界である。

「こんな生活、いやじゃあゝゝゝ!!!」

思わず叫んでしまったが、正直勘弁して欲しい。

一寸間違うと、即死だぞ!?

幸いと言えるのか分からないが、2度の死を乗り越えた上に、転生と言う神話的試練を、数回乗り越えた判定になったのか、只のモブだった俺は、魂の格がUR以上に磨かれたらしい。

目が覚めた時に餓鬼が飛び掛かってきたが、思わず振るった裏拳一発で消滅したのだ。

しかし、油断はできない。

ご存じの通り、メガテンは、ジャイアントキリングが通常営業のゲームだった。

何故か。

属性と、耐性。

いや、真面目に洒落にならない位、えぐいのだ、相克は。

つまりは、対応できる札を揃えなければ、気楽に乙るんだよね、メガテン世界。

考えなしの特化型は、何れ壁にぶち当たる。

悪魔憑きの親父も、代替手段としてカプセル怪異を持つてるぞ？

：レオ？

根性でぶち破る規格外（全耐性貫通）は…。

話を戻して、自身の事を再々確認しよう。

アナライズ、生えてました。

熟練度があるのか、殆ど見えないのがクソ仕様なんだが、

何とか、自分の適性職業と、レベルは確認できた。

諸星的

種族：人間 職業：デビルサマナー Lv8

二度見した。

親父は、怪我をする前はそれこそヤタガラスからも頼りにされる超一流だった。

その親父は。

諸星 弾

種族：人間 職業：デビルシフター Lv12

：やばい。

何も知ら無い状態なのに、Lvだけが上げてる。

悪魔にとつては、美味なエサがふらふら歩いてる状態だよこれ!?

サマナーは、契約する悪魔によつて汎用性はあるが、逆に言えば単体では弱い。

稀にライドウなんて言う規格外はいるけど。

仲魔と供に成長していくのが、肝だと思う。

つまるところ。

「仲魔をゲットできなきや、只の良いたしかならない……！」
いや、ホントにクソだな！

本来であれば、悪魔を召喚するには無茶苦茶面倒な手順が必要だ。
…でもね？

ナカシマ、ステイブが、やらかした。

悪魔召喚アプリ。

…いつの間にか、インストールされてました（怖）。

正直不安だけど、メガテン的に使わないほうがもつと不安だよ！

と、言うわけで、ちよつと熊谷市に行つてきます！

いや、覚醒するつて凄いな。

MTBで来たんだけど、軽い感じのランで3時間位で世田谷から熊谷に着いた。

さて、メガテンでお世話になる戦術の一つにジオ嵌めがあるのは異論はないと思う。

この系統の悪魔は世界で種々あるが、日本にも皆が知る大物が、いる。

雷神。

諸兄も、あの屏風は一度は目にしたことがあるだろう。

埼玉には、それを祭る大雷神社が数か所ある。

その中の一つに俺は来ていた。

由緒正しい境内に、今は人影はない。

一寸、人除けの香を焚かせて頂いた。

前世だったら監視カメラで問題になつただろうが、今は昭和末期。ガバガバ、有難うございます。

さて。

背負っていたリュックから、供物を取り出し。

“SUMMON DEVIL”

普通は、自分のレベルでは召喚できるはずもない。
だが。

悪魔とは、情報生命体である。
人々の概念、認識で変容する。

で、あるなら。

「もろぼし、あたるが懇願する！」

この、言霊に、あの供物があれば。

「うちを呼んだのは、お前け？」

ふわり、と、虹色の髪を靡かせて、彼女は舞い降りた。

「ラム、来たあ~~~~!!!」

有難う~~~~ございます、うる星やつら初版全巻セットサイン付き!!!

第2話：押入れの向こうは異界

「コンゴトモヨロシクだっちゃ、ダーリン！」

「ああ、コンゴトモヨロシク、ラム。」

実物の虎柄ビキニに包まれた健康ボディにムラムラしていたのを必死に隠していた以外は、懸念していたよりスムーズに契約にこぎつけられた。

スマホに入ってもらったラムのステータスは、

種族：鬼娘（雷神超劣化分霊）Lv10

電撃吸収 麻痺無効 酔い弱点

ジオ マハジオ 放電 魅惑の雷撃（弱体化中）

電撃プロレマ 道具の知恵（攻、癒）飛行

と、なっていた。

流石悪魔、情報生命体と言われるだけあって、実にラムらしいスキル構成である。

デバフ付き攻撃も便利だし、道具の知恵（攻、癒）で援護攻撃役としても優秀だ。

飛行できるのも、対人を考えると有利ってもんじゃないし、偵察にもアドバンスとなる。

因みにLv10って、大したことないと感じるかもしれないが、今の霊能界限で言うところ、大悪魔だからな？

玄さんなんかLv5で中堅どころと張り合ってるんだぜ。

ホクホクした気分で、一寸遠回りをしながら帰路に就いた。

青梅市。

東京の北西の境に位置するこの都市は、意外な程に妖怪譚が多い。小豆洗いがここでの妖怪なんて、ちよつと意外な感じがするよね。でも、ここで最もメジャーな妖怪と言えば。

そう。

雪女である。

”SUMMON DEVIL”

「私を呼び出したのは、あなた様でしょうか？」

まるで氷がそのまま髪と化したような、硬質で、なのに艶やかな白銀のポニーテイルの、白絹の着物を纏った美少女が、怜悧な眼差しを俺に向けながら顕現した。

「お嬢さん、お茶でも飲みに行きませんか？」

彼女、おユキさんが顕現した瞬間、俺の体は無意識的に動いていた。散々親父から「紳士たれ」と叩き込まれていたのため、エレガントにおユキさんの手を取り…

「まあ、いきなりそんなことをするなんて、はしたないですわ。ブフ。」

Freeze！

「ひよおおおおお！」

し、死ぬかと思った。

解凍後、おユキさんに謝り倒してなんとか契約は出来た。

いかんな、現世の俺、なかなか煩惱塗れで行動直結だったようだ。

それとも、「諸星あたる」と言う言霊に引っ張られているのか？

親父に大分矯正されていたようだが、気をつけなきゃお縄になってしまうぞ。

「では、コンゴトモヨロシクお願いいたしますわ、サマナー。」

「ああ、コンゴトモヨロシク。」

スマホに入ってもらった後、ステ確認を行う。

うる星でのおユキさんの能力から、あれが期待できるからだ。

種族：雪女 Lv10

氷結無効

ブフ マハブフ といき 絶対零度（弱体化中）トラポート

氷結プロレマ

やったぜ！

そう、原作ではおユキさんは温泉にも入れるのだ。

その為火炎が弱点ではない、これは大きい。

そして。

ゲートによる瞬間移動ができる。

しかも、海王星から地球まで気軽に来れちゃうのである。

まあ、流石にトラポートにはそこまでの能力はなく、一度行った地

点に転移できる、というものだが、非常に役に立つのは間違いない。早速再びおユキさんを召喚して、自宅の裏に転移してもらった（サマナーと仲魔は情報を共有しているため可能なのだ）。

おかげで夕食前には帰ってこれた。

「ただいま、おふつ…母さん、お、父さん、いる?」

「ええ、書齋にいるんじゃない? 決裁書類が終わらなかつたて持ち帰ってたから。」

台所でお袋に聞いたのだが、やばいやばい、いきなり口調が変わったんじゃないや怪しまれてしまう。

気をつけなくちゃな。

二階にある書齋の扉をノックする。

礼儀にはうるさいんだよ、親父。

「父さん、ちよつと話があるんだけど入ってもいいかな?」

「ん? 的か。どうした、入りなさい。」

重厚で、それでいて品の良い執務机で書類の山と格闘していた親父が、ふう、と一息入れて顔を上げる。

「ああ、父さん。お…僕は、あの怪我でどうやら覚醒したみたいだ。」

「なに!?!」

俺の言葉を聞いて、親父の顔が引き締まる。

「しかし的、お前に悪魔が憑いたようには感じられんぞ?」

「うん、父さん。僕にはそっちの才能はなかったらしい。」

す、と懐からスマホを取り出す。

「僕は、デビルサマナーだ。」

ぴ、とアプリの召喚タブを押す。

「パパさんけ? うち、ラムだっちゃ!」

阿鼻叫喚になった。

まあ、当たり前の話だ。

いや、俺も舞い上がってたんだけど、今の霊能界隈の常識ではLv10悪魔は、国家滅亡クラスの脅威なんだよね。

それをつい先日まではクソ雑魚だった息子が行き成り召喚したもんだから。

親父は慌ててカプセル怪異を投げようとするわ。

何事かと駆けつけてきたお袋が気絶するわ。

しっちゃんかめっちゃかになつて。

「バカモン!!!」

絶賛正座でお説教タイムを受けてます。

「お前はいつも準備が足りん！このような大悪魔を何も備えがない状態で召喚することが、どれほど危険な事なのかわかってるのか!？」

うう、仰る通りです…。

改めて考えるまでも無いが、悪魔とは人とは違う存在である。

いくらうる星の情報で構成されたとしても、その身を現界に留めさせる為には、MAGを必要とする。

手っ取り早く獲得するには、人を食らえばいい。

それをさせないために、通常は結界などで悪魔を囲って交渉する。

それでも、術者の力量が足りなければ結界は破られ、命を落としてしまうことが少なからず起こっているのが現実だ。

今回俺は、供物と俺自身を「諸星あたる」に見立てることで、絶対に上手くいく、と言う根拠のない自信で突っ走ってしまった。

この業界では、最もしてはならないミスだ。

MACに於いて、覚醒した霊能者は少ない。

居ても、Lv1〜2位で、とても怪異を調伏出来る実力は、無い。

しかし彼らは、文献の調査や周辺の聞き込み等で怪異の出来る限りの事前情報を引き出し、怪異に対して遠隔から破魔矢や符による属性攻撃を仕掛け、弱点を明らかにすることによって親父たちシフターを支援しているのだ。

知っていたはずだ、親父たちが如何に事前準備を重視しているかを。

自身の不甲斐なさに、ギリ、と奥歯を噛み締める。

「だがな、的。」

ぼん、と親父の手が頭に置かれた。

え、と顔を上げると、親父は、深い、優しい目をして俺を見つめていた。

「お前が昔から自分に歯がゆい思いをしていたのを私は知っている。零の才能に打ちのめされていたのも知っている。だが、お前は今まで血反吐を吐いても諦めはしなかった。確かにお前がしたことは許しがたい失態だ。それを踏まえても、敢えて言おう。」

くしやり、と俺の頭を撫でて、親父はフッと柔らかい笑みを浮かべた。

「よく頑張ったな、的。」

「とう…さん…。」

滲んでゆく視界。

そうか。

俺は、僕はこの人に認めてほしかったのか。

「とうさ…べ…あじが…。」

しゃくり上げながら親父の腕に顔を押し付けて号泣してしまった。

泣き止むまで親父は静かに俺を見守っていてくれた。

気恥ずかしさとともに親父とリビングに降りてきたら。

「へく、小さい頃のダーリン、可愛いっちゃね。」

「でしよう、ラムちゃん。昔はママ、ママっていつも後ろ付いて来て

ねー。」

「なるほど、お母さま。ではこちらの写真は？」

「あ、おユキちゃん、そっちはね…。」

なんか、俺の黒歴史の前で女子会やってた。

あの、お母さま？

とつても仲が宜しくなったのは良いのですが、顕現を続けていると、MAGの負担がですね？

え、心配させた罰、もう少しこのまま？

はい…

第3話：トラブルは舞い降りた

なんやかんやの家庭内騒動があったが、それは置いて。現時点で困ったことがある。

M A Cが俺を育てる事が出来ないという事だ。デビルシフターも、悪魔召喚アプリを使えば仲魔を持つことは出来る。

しかし、シフターは悪魔への変身にM A Gを消費する為、精々1体を維持する事が出来るかどうか。

基本戦術が全く異なるのだ。簡単に言うと、シフターは自身が最大戦力で、仲魔は支援主体となる。

逆にサマナーは、仲間を主体にしてその場で臨機応変に組み換えをする事が求められる。

これには、親父も頭を悩ませた。いかに親父が指導者として優秀であっても、知らないことは教えようが無いのだ。

じゃあ、知ってる人に聞けばいいと思うかもしれないけど、この業界、秘密主義なのよ…。

一子相伝、門外不出、純血主義、秘宝、e t c。加えて、権威主義がまかり通るんだよね…。

ウチみたいなの、明治の頃からの新参者お断りって、ホントなんなん？

仕方ないので、じゃあ実戦で体で覚えさせる、となったのは流石脳筋レオ世界と言うかなんか。

で、また困ったのだ。俺に合う異界、管理してない。

精々Lv3の餓鬼が出る位（これでも現状ではそこそなんよ？実際俺、死に掛けたし）の異界である。

しかも、得られるものはショボい（マツカがちよっぴり）のだ。

これでは、来るかもしれない終末に備えることも出来ないし、なに

よりM A C所員さんの底上げにもならない。

由々しき事態である。

俺は夕食の時に親父に切り出した。

「親父、今のウチの異界では、世間の悪魔のレベルの上昇に追いついていないよ。」

あ、親父、お袋呼ばわりは、前回のやらかしの後で「自分の区切りとするため」、と了承してもらった。

：お袋からは「女の子に格好つきたい年頃ですものね」、とニマニマと笑われたが、違うからね！

ん、んん！

と、取り合えず俺がそう言うと、親父も認識はしてたのか、

「そうだな。今の異界では、玄の特訓にもならない。しかし、他の管理異界は、ウチと縁が無いし：。」

と眉根を寄せて悩んでいる。

「親父、この間やららかしといてなんだけど、一寸異界のボス候補に思い当たる悪魔がいるんだ。鉦山と鍛冶を司る神に、ね。」

あの入院時に、今後の事を無い頭で考えていた。

もし終末が来たら、現在の物理法則は当てに成らなくなる。

であるならば、異界産のM A Gを含んだ鉦石を用いた武器が、今後必要となるはずだ。

生産拠点&鍛錬場は、絶対に確保しなければならない。

そう考えて検索したのだが、意外と近いところに良さそうな神様がいたのだ。

「むう：、確かに現状、ラムさんとおユキさんと言う大悪魔がいる：、ここは勝負どころか：。的、その悪魔について教えてくれ。」

悩みつつも訪ねてきた親父に、現状で考えられる相手の情報を告げながらデイスカッションを重ねて、許可をもぎ取った。

さて、俺は今またM T Bに乗って埼玉を目指している。

え、おユキさんの転移どうしたって？

：向かうところ、転移した後でM T Bに乗ってもあんまり変わらないんだ：。

川口市。

ここに目当ての神を祭る神社がある。
なんで鍛冶の神?、と思うじゃん?

江戸時代が関係している。

江戸の町は、兎も角火事に弱かった。

勿論生活に関わる鋳物何かは江戸の町で賄っていたが。

大規模な鍛冶場は、許可されない、いや出来ない。

足りない。

それを補っていたのが船運を利用した荒川・芝川水系である。

その鍛冶場の集積地の一つが、ここ川口市。

今でもモノづくり都市を掲げてるんだぜ。

と、調べた情報を頭の中で再整理している間に目的地に着いた。

金山彦を祭っている神社。

知らない人、多いよね?

俺も知らなかった。

いや、カグツチつてメガテンのにメジャー、いるじゃん?

それが生まれた時に、瀕死になった伊邪那美の吐物から生まれたらしいんだわ。

火しか関係ないよね、と思うけど、鋳物、鍛冶の神として、夫婦神とも、兄妹神とも記述されている神だ。

あと、金運も司どっている。

因みに、物作り日本らしく全国に3,000程神社があるらしい:

ホント?

さて、と。

人除けの香を焚いて。

アプリ、ポチ。

SUMMON

「どうしたっちゃ、ダーリン? やけにテンション低いっちゃよっ。」

もしもの時対策の為に呼び出したラムが、俺の周りをふわふわ浮きながら不思議そうに覗き込んできた。

今の俺のレベルだと、おユキさんと二体召喚してもMAGは問題無

いが。悪魔召喚時にどれだけ要求されるか分からない為ラム一人だけ顕現させている。

「あくいや、これから呼び出す奴は、出来れば！、呼び出したくは無かったんだが、しかし、実際有用だから仕方なくだな…。」

渋々と、更に気休め程度の性能の呪殺除けお札を、ぺたりと額に張り付けた後、悪魔召喚タブに指を滑らせる。

”SUMMON DEVIL”

うおっ!?!、えらく持つてかれたな!!?

空間が揺らぎ、白詰襟の学ランで腰に日本刀を履いた、オールバックのいけ好かないイケメン悪魔が、顕現した。

「私を呼び出したのは、貴様かああああ!!!!」

俺の顔を見た悪魔が、行き成り憤怒の表情を浮かべると、腰の日本刀をスラリと抜いて切りかかってきた!

「ぬあああああ!!」

はっし!

「む!?!」

カ、カカカカ!

あなたはスキル「真剣白刃取り」を習得した!

なんか、頭の中にモノローグが流れた感じがするが!

凄いで、的君の運動神経!

日本刀を両手で挟んで止めてるぜ!

「て、てめえ、行き成り切りかかってくるとはどどういうつもりだ!」

日本刀越しに悪魔に怒鳴りつける。

「分からん、だが何故か貴様は切らねばならんと思った!」

悪魔も親の仇を見るような目で怒鳴り返してきた。

「…ふっぎけるなよ!面堂お!!」

「…貴様に、名付けなぞされたくないっ、がつ、何故か魂がそれを受け入れているのが、また腸が煮えくり返るっ!!!」

「ぐぎぎぎぎぎぎぎぎぎぎ!!!」

「だ、ダーリンになにするっちゃ!ジオー!」

一瞬のやり取りをあつけにとられたかのように、ぽかんとした顔で

ラムはスキル「ジオンガ」を習得した！

再び土の上でぴくぴくと痙攣していると、面堂がよろよろと立ち上がった。

「く、ゆるさんぞ妹を貴様のような奴の仲魔なんぞに…。」

震える手で日本刀を構え直そうと…した所で、了子ちゃんの合図でどこからもなく表れた黒子達が、巨大な甕をガボン、と面堂の上から被せた。

「うわ〜〜ん、狭いよ、暗いよ、怖いよ〜〜!!!」

「お兄様ったら、鉱山で崩落事故があつて閉じ込められてから閉暗所恐怖症なんですの。…お兄様？出して欲しかったら契約をなさいませ？」

「分かったから〜、早く出してよ〜〜!!!」

カパン

「ふ、仕方ない、不本意ではあるがこの私の力を…」

ピ

RETURN

甕を退けられた瞬間、ふあさつと髪をかき上げて気障に言いかけたのがムカついて、途中で送還してやった。

「おほほほほ、戻る瞬間のお兄様のお顔ったら！やはり、面白い方ですわね、サマナー様。コンゴトモヨロシクお願いいたしますわ。」

「ああ、コンゴトモヨロシク、了子ちゃん。」

さて二人とも送還した後は恒例のステチェックである。

面堂終太郎

種族：国津神（金山彦劣化分霊） Lv10

火炎無効 魅了弱点（改善不能） 閉所弱点（改善不能） 暗黒弱点

（改善不能）

五月雨斬り ヒートウェイブ 挑発 タルカジャ

物理プロレマ 金運

面堂了子

種族：国津神（金山姫劣化分霊） Lv10

火炎無効 毒耐性 退屈弱点

毒針 ポイズマ プリンパ ダストマ スクンダ デカジャ
毒の使い手 金運

…面堂の方は分かるけど、了子ちゃんのこれ、いや、ホントこれナニ？

デパフばら撒きじゃん、怖!?

え、ホントに神様?…メガテン世界では標準だったわ(呆れ)。

ま、まあ、目標は達成したからいいじゃろ!

まだブツブツと文句を言ってるラムを宥めて送還し、呼び出したおユキさんに転送してもらって帰宅したのであった。

予定に無い二体の大悪魔を連れ帰ったことで、俺がまた、親父の特
大の雷を食らったのは言うまでもない…。

第4話：男だ！燃えろ！

早速異界の再編成に乗り出した。

と、言っても今までのボスを討伐して面堂に挿げ替えたただけだが。ボスと言っても、Lv5の餓鬼。

落魄しているとはいっても、ネームド神に敵うわけもなく。

「フハハハハ、この面堂終太郎の敵では無いわー！」

はい、キンクリキンクリ。

さて、これでこの異界には、あの悪魔が出現するようになるはずだ。イツポンダタラ。

メガテンではこいつのレアドロップにお世話になった。そう。

道返玉。

リカム切れの時のお守りとして、序盤〜中盤では携帯必須であった。

しかし、今までではそれを入手できる伝手が、無かった。

イツポンダタラが出現している異界の情報は全く無く、または秘匿されているかで、ごく稀に裏のオークションで流れてくることがあるようだが、落札価格は青天井で、ウチが入手できるはずも無かったのだ。

しかし、メガテン世界とレオ世界とが悪魔合体した現世、事故に備えることは急務であった。

故に、断腸の思いで、清水の舞台から飛び降りる気持ちで面堂（金山彦）を召喚したのだ！

これからはボスとして異界に縛り付けるから、顔を突き合わせることもそうそう無いだろうしな!!

：了子ちゃん来るかもな、と期待もしてたし（ぼそ）。

親父に道返玉のことを話すと、このことは俺と親父だけの秘匿情報とすることになった。

まあ、いつかは漏れるにしても、今漏れたら、間違いなく大手に飲み込まれてしまう。

玄さんや、所員を鍛え上げ、俺の戦力の底上げが進むまでは封印だ。「ふむ、これで玄に更なる特訓を課すことが出来そうだ。」

厳しい顔をしていた親父が、ふ、と満足そうに呟いた。

…ごめんよ玄さん、強く生きて欲しい。

ところで了子ちゃん、その黒子の方々なんですけど、アナライズ弾かれるんですが？

もしかして、オングヨウキとか言わないよね？

了子ちゃん？、了子ちゃん!?

ナレーシヨ天のン声

「一方其の頃MACは、夜間に頻発する不可解な女性連続惨殺事件を追っていた。」

「いや、参ったな。現場に残ったMAGの残滓から悪魔事件なのは間違いないが、手掛かりが少なすぎる。」

ぎし、とチェアの背に凭れかけながら、副所長の黒田がぼやく。

「共通しているのは、夜間の犯行であること、被害者は若い女性であること、何か槍状のもので貫かれていること。それ以外は場所も容姿も時間帯もバラバラ。」

青島も眉間を揉みながら続ける。

「パトロールしようにも、完全に運任せですからね…。」

いつもはクールな態度の赤石も、連日の夜のパトロールに疲労が隠せていない。

「弱音を吐くんじやない、我々がやらなければ被害は増大するんだ。気合を入れ直していけ！」

「「はいー」」

弛緩した雰囲気か漂ったところに響いた弾の檄に、気持ちを建て直して立ち上がるMAC所員。

遅番の玄が仮眠室に向かおうとしたところに、同期の白土が近づいてきた。

「大鳳、すまないけれど洋子さんを自宅に送ってくれないか？早番で俺は出来ないけど、ほら、物騒だろ、今。」

拝みながら頼んでくる白土。

白土の婚約者の洋子もM A Cに所属しているが、霊能力は無く、完全に事務方である為、夜は当然自宅に帰ることになる。

「確かに…、分かった、任せてくれ。」

気持ちよく引き受ける、玄。

途中参加の自分に、隔意なく接してくれる白土に協力するのは、吝かではない。

「すみませんね、大鳳さん。遅番もあるって言うのに白土さんったら！」

「いや、洋子さん、近頃は女性の一人歩きは危険です。それに近いしへっっちゃらですよ！」

コツコツと、人気の途絶えた住宅街に二人分の靴音が響く。

世田谷は都会とは言え、大通りから離れると街路灯も少なくなり、薄暗い。

と。

角を曲がった先に、電球が切れかけているのか頼りなく点滅している街路灯の下に鬱蒼と佇む影があった。

「ん？」

違和感を感じて足を止める、玄達。

足を止めた二人に、ゆっくりと影は振り向いた。

妙に人間味に欠けた、爬虫類じみた顔。

そして。

真紅に光る、目。

「っ!!」

息を？む二人の眼前で、それは怪光を放ち…変身した。^{シフト}

やや薄汚れた緑の皮膚色の、まるで爬虫類が二足歩行しているかのようなシルエットをしており、頭部は、昆虫と爬虫類を掛け合わせたような不気味な風貌で、極めつけは両肩から生えている、湾曲した鋭利な角状突起。

ナレーション^天の^声

「狩居 清二(かりい せいじ)は快樂殺人者である。悪魔憑き^{デビルシフター}として

の力を使って、若い女性を嬲りながら殺すことを好んでいるのだ。」
「洋子さん、下がって！」

洋子を庇う様に前に飛び出した玄は、空手の演武のような動きを繰り出し、咆哮する。

「レオー!!!」

獅子の瞳（レオリング）が赤い光を放つ時！

レオは顕現する!!

『イヤアアー!!』

赤き拳が、狩居の顔面を捕らえ、踏めかせる。

見よ！

ヘラクレスオオカブトを連想させる3本角の冠を被ったような、アルカイックスマイルを浮かべた仏像を思わせる銀色のマスク。

真つ赤なボディに、銀色の襟飾りをし、中央にエメラルドの輝きの宝玉を纏う、異形。

これが、レオだ！

続けて蹴りを放とうとする、レオ。

しかし。

戦いの経験では、狩居に軍配が上がった。

“テトラカーン”

『!?!』

自身の攻撃が反射され踏鞴を踏む、レオ。

“コロシの愉悦” “突撃”

CRITICAL!

『へア!!』

其の隙をつかれ、肩の槍に衝かれ、大きく跳ね飛ばされ、地に伏す、レオ。

ぎろり。

それを確認し、洋子に向ける、暗い愉悦に満ちた、眼差し。

「ひっ……い」

“メガトンプレス”

獲物に向かい飛翔する、狩居。

レオが手を伸ばすが、届かない、届くはずも、無い。

迫る洋子の、絶望に染まった、顔。

ああ、そうだ、その顔だ…！もつと怯えろ！！

「ぬああああー！！！！」

“うちまくり”

「ふべらばっ！」

冗談のような大槌をぶん回して乱入してきた何者かに、水平に吹っ飛ばされる、狩居。

「間に合ったあ〜！！玄さん、洋子さんは俺に任せてくれ！じやあ！！」

その闖入者は、息も付かせぬ怒涛の勢いで洋子を小脇に抱えると、ピューと言う擬音が相応しい速さで視界から消えていった。

何とも言えない空気が流れる現場。

敢えて表現するとすれば。

・

で、あろうか。

しかして、両者ともに、ハツとしてファイティングポーズを取った…ところで戦場にアラームが鳴り響く。

ピコーン、ピコーン。

ナレーシヨ天ン声

「レオが現界に顕現できる時間は2分40秒である。愚者が戦場に迷い込まないよう、簡易異界を形成するのにMAGを消費しているのだ。頑張れレオ、負けるなレオ！」

追い込まれたレオは、自身最大の技を選択する。

レオキック！

だが、焦りと共に放たれた未熟な技では。

“ぶちかまし”

熟練の技に敵うはず、なし。

レオは、倒れ伏した。

普通であれば、終わりであるが。

この簡易異界、チートである。

自身がやられたとき、相手のMAGを奪ってリカムするのだ。

狡い？ ウルトラマンシリーズ 原作 見て言え。

「くっ！」

止めを刺そうとしたとき、急激にMAGを奪われて変身が解ける、狩居。

近づくサイレンの音に舌打ちをしながら、現場を去るのであった。

あつぶなかつたくっく！

急激に膨れ上がった玄さんのMAGに泡食って駆けつけたら、洋子さんが、きつしよいトカゲモドキに踏みつぶされ掛けてた。

記憶って、突然繋がることあるんだね。

6話かって、思わず叫んじゃったわ。

取り合えず洋子さんだけ救出して、撤退した。

ん？、レオ手伝わないの、って？

：やだなあ、レオは、追い込まれるほど覚醒するんだよ？

だから、次に来る親父の特訓は、俺は知らない、関りも持たない、無
いっいたら、無いんだ！

逃げられませんでした。

ジープの代わりに、イッポンダタラ（サングラス）軍団の、
ガンパレードマーチに見舞われました…。

え、レオの狩居再戦？

楽勝でしたよ、ハハ☆

第5話：いい日旅立ち

狩居事件が解決して、今更ながら気が付いた事がある。

俺の仲魔、回復持ち居なくね？

イツポンドタラにど突き回されて、お袋からディアを受けた時、そう言えば、となつたのだ（因みにあの虐待じみた特訓を見ていたお袋は、「あら、懐かしいわね。」と微笑んでいた：昭和ウルトラマン世界え：）。

早速ゲットじゃ、と家を出ようとしたところで、親父から呼ばれた。「的、一神教から依頼が来ている。黒田副所長に行ってもらおう予定だが、お前も他の組織と行動することを、少しづつ慣れてもらおうと考えている。今回の依頼は危険性が低いと判断しているから、副所長に同行するんだ。」

ぺら、と依頼書を渡してくる、親父。

なにになに：、ああ、メシア教が世田谷に潜伏して陰謀を企んでいるけど、一神教のエクソシストが地理に不案内なので、協力してほしい、か。

敵として想定されるのは、メシア教の神父と、エンジェルが2、3体ね。

なるほど、危険性は低いな。

エンジェルの攻撃手段はハマだ。

これは、人間には基本効かない。

当り前だ、人間は悪魔ではないのだから。

悪魔憑きは、基本無効（悪魔によってはそちらに引っ張られる事もある）、悪魔人間は破魔無効でない限り効果あり、となる。

終末に備えるためにも伝手は多いほうが良い。

「分かった、勉強させてもらうよ。」

出掛けに、無許可でアナライズをかけるのは敵対行為だとの注意を受けてから、待ち合わせ場所のMACに親父と向かった。

：気軽に了承した自分をぶん殴りたいです。

「今回の依頼を受けてくれて感謝する、一神教司祭の唐巢和宏だ。」

目の前の、とても神父とは思えないやさぐれた目をしたイケメン：
GS美神世界混じってんの!?

しばし呆然としていた(黒田さんは初めて他の霊能者と会うので緊張していると勘違いしてくれたようだ)が、唐巢神父はまだ20代の様で、落ち着け俺、美神の物語はまだ始まっていない、コスモプロセスによる世界改変はまだ無い、はずだ(アスタロトによる準備は進んでいるかもしれないけど)。

うん、数あるメガテン世界崩壊の可能性にまた一つ加わっただけだな!(お目目ぐるぐる)

∴orz

こんな内心の俺と唐巢神父を乗せて、黒田さんは住宅街へMAC社用車を進めていく。

因みに黒田さん、Lv3で、懐剣型の霊刀(ほんのり霊格を感じる位)を用いた組内術の使い手で、スキル“鎧どおし”が使えるとの事。MACでは、親父、玄さんに次ぐ実力者だ。

今、俺らは当てもなく移動しているわけではない。

メシアンはまず、霊地を抑えにかかる。

そして、天使を核にした異界を築き上げて行くのだ。

つまり、最近まで周囲にMAGを拡散させていたところが、急にそれが感知されなくなった場合。

「新たに異界が形成されて、メシア教徒が潜伏しているかもしれない、という事なんだよ、的君。」

ハンドルを握りながらそう説明してくれる、黒田さん。

そう言った場所は当然MACのパトロールでもチェックされており、定期的な見回りに入っているそうさ。

積極的に除霊はしないのだった?

よそ様のところに勝手に入ったら、いかんでしょ。
依頼があったらやりますよ、ウチは。

その一つに、到着して車外に出た途端。

「当りだな。」

唐巢神父が、す、と懐から聖書を取り出した。

そこは、一家心中があつたという空き家で、かといつてそれほど年月が経つてないんで、荒廃もしていない普通の…ん？

「ほう、分かるか、面白い。」

意外そうに俺の方を向いて、ニヤリと笑う神父。

そう、清浄すぎるのだ、空気が。

まるで神域のように。

「メシア教のくそ天使共は、悪魔の存在を憎悪している。だから、自分たちのテリトリーは、徹底的に掃除をするんで、こういう空気になるわけだ。」

そう言つて右足を上げると、ドカン、と靴底で玄関のドアノブを蹴り壊す神父。

「つちよ、一寸唐巢神父、駄目ですよ！まだ許可が！」

「ああ？何言つてやがる。んなの待つてたら、犠牲者が出るかもしれないじゃねえか。」

慌てる黒田さんを尻目に、ズカズカ家に入り込む神父。

その後を追いかけるように、家に入る…

キン

視界が、世界が、変転する。

気が付いたら、荘厳な、豪華なステンドグラスから光が差し込む聖堂の中に、俺たちは居た。

神聖な、祈りの場。

ただし。

祭壇の周囲に、赤子の死体が積み上げられていなければ、だが。

「くそつたれ…。」

ギリッ

神父の、奥歯を噛み締める音が響いた。

「おやおや、迷える子羊達の来訪ですか？」

耳に心地よく、まるで心の奥まで撫で摩る様な、甘く、吐き気のす

る声が、響いた。

ぎ、と振り返ると、そこには。

平凡で、違和感しかなく、温厚そうな、寒気がする、徳の高そうな、ドブの香りがする、神父が佇んでいた。

「貴様、栗獲神父！異端審判を受ける直前、姿を晦ましていたが、メシア教に属していたか！」

唐巢神父が、嫌悪感を隠そうともせず、叫ぶ。

「貴様は、貴様は！、まだ救世主計画を諦めていなかったのか！」
プロジェクトメシア
ミレニアムプロジェクト
千年王国計画、進行してる!?

その、唐巢の糾弾に、穏やかな顔を崩さず、心底困った様子で、幼子を諭すかのように、栗獲は、口を開いた。

「やれやれ、唐巢君。以前にお話をしたではありませんか。救世主様が降臨されないのは、それに耐えうる母体が居ないからです。で、あるなら、我々がその母体を準備せねばならないのです。その為に。穢れなき天使様と、罪なき赤子を合体させるのは、当然ではありませんか？」

ニコニコと、全く邪気が無い、見るに堪えない、笑顔でそう嘯く、栗獲。

これが、メシアン。

ゲームでは知っていた、嘲笑した、ネタにもした。

だが、目の前にいる、それは。

あまりにも、悍ましく、逸脱している。

しらず、俺の膝は震えていた。

「違う！」

唐巢が叫ぶ。

「終末は、何れ来るだろう！だが、救世主は、作られるものではない！汚濁の中から自然と立ち上がって来られる、尊き存在だ！人間が人工的に作れるような、薄っぺらいもので、あるはずが無い！」

清涼な風が、吹いた。

そうだ。

意思が、前に進むという気持ち折れなければ、負けではない。

ぐ、と膝に力を入れ、栗獲神父を睨み付ける。

「…これだから、背教者と異教徒は、度し難い。だが、無知ゆえの罪。その罪を許し、じっくりと教化して差し上げます。」

す、と手を上げる、栗獲。

栗獲の背後に現れる、3体のエンジェル。

「さあ、神の祝福を受け入れよ！」

勝ちました。

いや、Lv3〜5の天使と、Lv5の神デビルサマナー 父相手だから、当然と言えど当然なんだが。

一神教に警戒される恐れがあるので、今回は仲魔の使用を禁止されていたため、唐巢神父に回復してもらいながら、俺と黒田さんがクソ天使のSPが切れるまで、延々と殴り続けるという泥仕合の末の勝利であった。

一寸でも削ると、祝福で回復されるし、死んでもリカムだし…。何でか狂ったようにハマを連発してくれたから、SP切れが早かったのが唯一の救いか。

「今回は助かった、何かあったら連絡してくれ。」

祭壇の横に奇麗に並べられて、白布がかけられた遺体達に静かに祈りを捧げていた唐巢神父は、立ち上がると沈痛な面持ちで礼を述べてきた。

これから一神教の処理班が来るとの事なので、神父からの報告書と謝礼は後日受け取る事にして、俺たちは退散することになった（処理現場は組織の秘匿技術等あるため、関係者しか入れないのがこの業界の不文律である）。

帰りの車内で、今回の件を反省する。

あの、ゲーム時には雑魚扱いのエンジェルでも、回復できるという事がこれだけ厄介だとは。

実体験をしないと、分からなかったぜ。

親父に報告してMACから出たのは、まだ日も高い3時。

さて、天使対策にムド系を使える悪魔も確かに必要であるが。

「まずは、回復役が必要じゃあ〜〜！」

今、MTBで海岸線を爆走してます。

あ、江の島が見えてきた。

BGMにサザンが欲しいところだぜ（中身令和50台おっさん）！

江の島とくれば、もうお分かりと思うが、弁財天（サラスヴァティ）が祭られている。

しかし、弁天様のコスチュームも際どいけど、ここの弁財天様、真っ裸なんだぜ？

良く公開できてるよな。

さて、人除けとラムを召喚して、と。

”SUMMON DEVIL”

じやらん、と右肩から襷に掛けた鎖の音を響かせて、やや癖のある髪を後ろで纏めた、右肩だけ甲がある際どい真紅のビキニアーマーを着用した一体の地母神が、顕現する。

「あたいを喚び出したのは、てめえか？」

「そうだ、うわつと！」

また無意識に体が動いて、彼女の手を取りに行こうとした…刹那に、俺の爪先の地面に鎖が叩きつけられた。

「ダーリンになにするっちゃー！」

詰め寄ろうとするラムに、ば、と手を開いて押しとどめ、彼女は言い放つ。

「あたいは、自分が認めたやつにしか従わねえ。実力を見せてみな、サマナー！」

言うや否や、頭上で振り回した鎖を俺に叩きつけ、引き戻す流れで裏拳を叩きつけて、上に注意を向けさせたところで、躊躇のない金的蹴り。

「うわつ、ちよつ、ひえつ！」

半身になって鎖を回避して体を反らして裏拳を躲し態勢を戻す反動を利用して後ろに飛ぶ！

「ちよこまかと妙な動きで逃げ回りやがって、反撃位しやがれ！」

「俺は、女は殴らないと決めてるんだ！」

え、お前天使ボコボコにしてたろ、って？

あいつらTINTINついてるからノーカン!!

「ふざけやがって！戦いに男も女もねえ!!」

憤怒に顔を朱に染めて、顔面目掛けて目にも止まらぬ速さの拳を叩きつけてくる！

それを、ぬらり、と紙一重でかわしながら、俺は後ろに回り込んだ。

「なに!!」

慌てて俺から距離を取る。

はらり。

その背に、纏められていた髪が、広がる。

「な…!？」

驚愕に見開かれた瞳の前で、俺はクルクルと髪留めを人差し指の周りで回して見せた。

「これで、どうかな？」

「…ち、納得いかねえ部分もあるが、実力はあるようだな。仕方ねえ、コンゴトモヨロシク、だ、サマナー。」

「コンゴトモヨロシク、弁天様」

さて、弁天様のステチェック、つと。

種族：女神（弁財天劣化分霊）Lv10

火炎弱点 衝撃耐性 呪殺弱点 混乱耐性 魅了無効

ザン バインドボイス デイア リカーム

衝撃プロレマ 騎乗の心得

：あれか、鎖を高速で振るうことで衝撃波が起きるといふ事ね。で、姉御の叱責で身が竦む、と。

マジで悪魔って情報生命体だな。

てか、騎乗の心得なんてスキル、あったか？

今後についても考えさせられる事が多かったが、大満足で帰宅したのであった。

：無事を伝える前に出かけるとは何事か、と、お袋に正座の上懇々と説教を受けたのであった…。

第6話：あなたにあげたい

面堂による異界の改変は順調に進んでいる。

Lv8前後のイツポングラス^{サングラス}軍団^{軍団}が闊歩するようになり、親父も、玄さんやMAC所員をみっちり鍛える事が出来ると、恵比須顔をしている。

鉄、銅、金を筆頭とした鉱石も少しずつ採掘できるようになっており、武器製作も開始間近である。

しかし、終末後を見据えると、全く足りていない。

もっとも確保が急がれるのは、なんとと言っても水だ。

人間水がないと生きられないし、農・工問わず水を必要とする。

いざ、仲魔確保じゃ！

あ、もちろん親父の許可はとったぞ？

今回は、関東内ではあるが、世田谷からは一寸遠い。

千葉県を跨いだ、茨城県北相馬郡利根町。

ここに、江戸期、関八州の河童の頂点を極めた大河童がいた。

禰々子河童。

名が残っている河童の中では、珍しい女の河童である。

ぴ、と、ラムを呼び出して、人除けをして。

”SUMMON DEVIL”

「私を呼び出したのは、あなたですか？」

黒セーラーを纏ったおかつぱ頭の美少女が、顕現した。

うんうん、やつぱりしのぶはおかつぱで、少し微妙な体形をしてて、

怪力とくれば、河童しかないでしょ！

ちよんちよん、と、ラムが俺の肩をつつく。

「ダーリン、声出てるっちゃよっ。」

え

ぎぎ、と振り返ると。

ゴゴゴゴゴゴゴゴと言う擬音をバックに、一抱えもある大岩を頭上に構える、彼女。

「どっせーっ。」

「ふぎやー!!」

死ぬかと思った。

もちろんしのぶには誠心誠意謝って契約に漕ぎつけた。

「ゴンゴトモヨロシク、サマナー君。」

「ゴンゴトモヨロシク、しのぶ。」

さて、ステ確認、と。

種族：妖鬼（河童） LV10

氷結耐性 火炎弱点 破魔弱点

ブフ 暴れまくり 怪力乱神 淀んだ空気

物理ギガプロレマ

：あれか、尻子玉抜かれると腑抜けになるのが、淀んだ空気というスキルになったのか？

相変わらずスキルについては謎が多いな。

さて、とラムを戻して。

よっこら、と再びMTBに跨る。

え、トラポートしないのかって？

寄るところが、あんだよ（溜息）。

ひいこらとペダルを漕いで、やって来たのは東京都台東区。

ここには、地藏菩薩が安置されている寺がある。

：もう分かっただろ、そうあいつだよ！

俺だって呼び出したくはねえ！

でもな、二十八種利益と七種利益、このご利益を無視できるわけないだろ!?

おまけに、施餓鬼法要って、地藏菩薩と切っても切れない関係なんだよ。

つまり、今後異界で米を栽培したら、施餓鬼米が取れる可能性高いじゃん？

喚ぶしかないだろ：

どんよりとしながら、人除けを行い、ラムを呼び出す。

”SUMMON DEVIL”
にゆるん。

「不吉じゃ。」

行き成り目の前に、背が低い僧形で、開いているか分からない三白眼系目の禿頭がドアップで顕現した。

「ぬわあぁ〜！」

反射的に後ろに飛びのく。

「なんじゃ？これ位で狼狽えおつて。性根がなつとらんかう。」

やれやれと溜息をつきながら肩を竦める、悪魔。

「ぐ、が、ぎ、てめえ〜！」

「ん、ワシの力を必要としとるのではないのか？頭を下げれば考えてやらんこともないぞ？」

「~~~~~!!!」

落ち着け、計画の為にここは堪えろ

「お”ね”か” い”し” ま” ず”

歯を食いしばりながら、悪魔に向かって頭を下げる。

「ふくむ、ちよ〜つと心が籠っておらんが、まあよかろう。コンゴトモヨロシクのう、サマナー。」

「コンゴトモヨロシク、錯乱坊^{チエリ}。」

ふう、心を落ち着けて、ステ確認。

種族：鬼神（地藏菩薩劣化分霊）Lv10

破魔無効 呪殺無効

地獄突き タルカジャ ラクカジャ スクカジャ テトラカーン

マカラカーン サバトマ

二十八種の利益（弱体化） 七種の利益（弱体化）

：錯乱坊の癖して、クツソ有能じゃん!?

レギュラーに、なるの、か、錯乱坊が!!?

あまりのことに、ラムから放電を受けるまで放心していた、俺なのであった。

その日は、ぐったりしながら帰宅してお袋を心配させてしまったのは余談だ。

さて、しっかりと休んで翌日。

加えたくもない仲魔をあえて増やしたのは、他にも理由がある。

今後のことを考えると、医薬を司る悪魔が必要だ。
しかし、これから呼ぶのは女性。

日本に居る神仏妖怪に、女性で医薬を司る存在が見当たらない。
令和の世であればTSネタにもあふれていたが、昭和末期ではまだ
罰当たりであるとして、神仏の性別については、既存概念の方が強い。
まあ、この頃の例外がラムであるのだが。

しようがないので、海外の神様を召喚することにした。

準備のため、神田の古書店を巡ってゲットした「エツダ 古代北欧
歌謡集」。

その中に記述されている、医療の長を務めているエイル。
霊的な治療も行っていた、と言う共通項と。

ぴ。

「何か用でもあるのかの?」

管理異界で、ラムとともに錯乱坊を喚び出す。

悪魔が顕現しやすい異界で、縁の深い錯乱坊がいるのであれば。

”SUMMON DEVIL”

「なんじゃ、私を呼び出したのは、お主か?」

艶のある腰まで伸びた髪、白衣を身に着けたハスキーな声の美女
が、顕現した。

「ええ、お美しい方、ぜひ私の仲魔に…ふべっ!!」

す、と、美女の手を取ろうとした俺の頬に、鋭い祓串の一撃!

「ええい、はらったま、きよったま^散!」

宙を舞う俺に、更なる追撃!

「ダーリンの、浮気者〜!!」

”ジオダイン” SHOCK”

「あが、あがががが!!!」

「運命^{さだめ}じゃ。」

チーン

「仕方ない、契約してやろうぞ。コンゴトモヨロシクじゃな、サマ
ナー。」

「コンゴトモヨロシク、サクラさん。」

土下座懇願の後、なんとか契約出来ました。

種族：ヴァルキリー亜種 Lv10

破魔耐性 魅了耐性 衝撃弱点

会心波 デイア メデイア リカーム パトラ 暴飲暴食

薬草の知識 医学の知識

あゝ、カースデイ無かったか…。

親父の膝の呪い、解けると思っただけだ。

薬草がらみで、アムリタに期待するしかないか。

それでもこのスキル構成、十分ヤバいけど。

特に、暴飲暴食さんえ…。

因みに、錯乱坊にお米をお供えしてみたら、「施餓鬼米（劣化）」が出来ちゃった。

効果は、低級霊なら消滅、ある程度の破魔弱点悪魔であつたら怯む、と言った感じになった。

ヤバいわ、地藏菩薩…。

第7話：憎み切れないろくでなし

異界の拡張は順調だ。

最初は体育館位の大きさであったのが、今では直径500m位の範囲に広がっている。

異界の中央には100m程の高さの鉾山が配置されていて、木々は生えていない。

そこに、しのぶとサクラさんが加わったことにより、中腹に湧き水による小さい泉が出来、そこから清流が流れだして、周囲に藁草が生えてきている。

清流脇の山裾には質素な小屋が立っており、ボス部屋兼、鍛冶小屋である。

既に面堂は、イツポングラス軍団が集めてきた魔鉄を使つて鍛冶を始めており、霊槍の作成に成功している。

なに？、刀は作らないのかつて？

先ず、まだ魔鉄の採掘量は少なく、刀を打てるまで、無い。

そして、刀つてやつは素人が扱えるものじゃないんだぜ？

下手すりや自分の足を斬ってしまうし、刃をしっかりと立てないと、斬ることも出来ずに曲がる事すらある。

刀に精通した新選組でも、池田屋討ち入りの後では鞘に入らなかつたつて言うしな。

その点槍は、農民主体だった足軽が使用していた事からも分かるように、比較的容易く扱える。

なにしろ、へっぴり腰でもミドルレンジから攻撃できるし、振り回しても自分を傷つける可能性が低い。

まあ、極めるのは逆に難しいけど。

それは兎も角として、異界が拡張するにつれ、イツポングラス軍団以外の悪魔も出現するようになった。

ジャックランタン。

メガテン世界では有名な、アギ使いの悪魔である。

やはり鍛冶神がボスだからか、異界の性格として火炎属性が強く出

たのだろう。

そこらでフワフワと浮いている。

一見、魔法使いのコスプレをしたパンプキンヘッドが、空中で踊りあっているかのようなファンシーな風景だが、管理異界じゃなきや、絶望的だな。

四方八方からアギが飛んでくるかもしれないんだぜ？

今、ここで鍛えられているMAC所員の目標は、ジャックランタンを仲魔にすることだ。

Lvは5〜6で、スキルもアギ位しかないのだが、遠隔攻撃があるのは大きい。

特に、女性所員の桃井さんの熱意は高い。

…まあ、見た目がかわいいもんね。

「ねえ、ダーリン？新しい仲魔を喚び出すのじゃないのけ？」

現実逃避をしながらジャックランタンを眺めていた俺を、頭上から逆様にラムが覗き込んできた。

「分かっとなる…：はあ。」

しぶしぶとアプリに指を沿わせる。

知ってるか？

ジャックランタンの日本語訳って、鬼火なんだぜ？

つまり…。

”SUMMON DEVIL”

「なんや、ワイを喚び出したんは、お前か？」

ラムと似た髪色の、虎柄パンツをはいた頭に小さな一本角が在る幼児が、顕現した。

「そうだ、だから契や」

「うわあ、お姉さん綺麗えやなあ、お名前教えてんか？」

言い掛けた俺の言葉の途中で、ふよふよとラムの方に移動する、ジャリ。

むんず、と頭を掴んで引き留める。

「何さらすんじゃ、われ！」

「じゃかあしい、人の話の途中だぞ！」

「知るか、ボケ、世の中の綺麗な姉ちゃんは、みくんなワイのもんや！」
ぎやあぎやあ、と、罵りあう俺らを見て、ラムがぽつりと零した。
「…なあんか、よく似てるっちゃんね、二人とも？」

そのラムの言葉にガーン!!と言う擬音が見える位の驚愕を顔に張り付けながら、ジャリはヘロヘロと落ちて行つた。

「そんな、ワイが、こんな阿保面した間抜けと似てるやなんて、とても耐えられへん…!」

「ホント失礼だな、お前!!」

すつたもんだはあつたが、ラムからの説得もありジャリは渋々肯いたのであつた。

「しゃあない、契約したるわ。コンゴトモヨロシうな、サマナー。」

「ああ、コンゴトモヨロシク、テン。」

さて、テンのステは。

種族：妖精（ジャックランタン） Lv10

火炎吸収 氷結弱点 魅了弱点

アギ アギラオ

浮遊

まあ、ジャリテン、原作でも火炎放射器としてしか活躍してないし、こんなものか。

しかし、大分属性もそろつてきた。

あとは、衝撃と破魔と呪殺か。

破魔は、多分、信じられない気持ちはあるが、錯乱坊が覚えるだろうな、あれでも地藏菩薩だし。

衝撃と呪殺は、心当たりはあるけど遠いからなあ。

日帰りではいけないし…少しずつ距離を伸ばしてトラポートを繰り返すしかないか。

豊穰を司る悪魔も仲間にしなきゃならないしな。

テンには再びスマホから出てきてもらつて、異界に待機してもらうことにする。

この悪魔召喚アプリ、機能としてはシンプルで、召喚機能と、5体までの悪魔をMAGの消費無く収容できることと、待機中の悪魔のス

テータスを表示する位しかない。

悪魔が死亡した時は自動で戻って再召喚できるようになる、と言った機能もないし、エネミーサーチ機能や警戒機能もない。

シンプルに悪魔をプログラミングコードに変換して、メモリーに記憶させているだけだ（それでも十分すぎるほど偉業だが）。

一応他の記憶媒体にバックアップすることはできるが、どうやって認証しているか不明だが、マスターで無いサマナーが召喚しようとしても不可能で、またマスターであつても同時に同じ悪魔を顕現させる事は出来ない。

バックアップが出来る管、と言ったほうが良いか。

正直これを使うことに抵抗が無いわけではない。

これによりサマナーが増えて悪魔を召喚すればするほど、GPが上昇して終末に至りやすくなるだろうし、全くの素人が、興味半分で使つて悪魔の餌食になっていることも、起こっているはずだ。

幸い覚醒していない一般人が使つても起動せず、只のジョークアプリとして表では扱われている。

しかし、使わなければ備えることすらも出来ないのだから、もう開き直つて使っているのが現状だ。

基本俺は仲魔を閉じ込めていることは好まないし、異界の成長にも良いので異界に居てもらうことが多い。

移動時には、3体ほど組み合わせる中に入ってもらい、自宅では、自分のMAG容量を増やすために常に誰か一人顕現させている。

：お袋が、娘を欲しがっているのは、関係ないぞ、うん。

そんな仲魔の中でも、特殊な立場になった者がいる。

おユキさん、現在MACに出向しているのだ。

戦闘目的ではない。

経営コンサルタントである。

今異界の入り口は、MAC所長室の可動式書架裏に、嚴重にMAG漏れ対策をした上で繋いである。

この気軽に異界に潜れる環境で特訓を受け、MACは少しずつ地力が付いてきていた。

玄さんはLv8、黒田さんはLv5、他の所員もLv2〜3となっていて、少しずつ上昇する悪魔へも何とか対応できている。

しかし、他の零細退魔組織はその上昇に耐えきれず、組織崩壊に追い込まれるところも出てきていたのだ。

親父は、それらから残った人員などを引き受けていたのだが、その計画性の無さを見るに守銭奴の血が騒いで見かねておユキさんが手伝ったのが切っ掛けだ。

そこから他の経理やなんやらにも手を付けて、気が付けば今やMACはおユキさんが居ないと回らない、とまで言われる状況になってしまった。

MAGもMAC負担となっている。

おい、親父、良いのか？

事務作業から解放された嬉しさは分かるが、「的の最大の召喚の功績は、おユキさんだ。」、って言うてるけど、退魔組織がおユキさん悪魔に乗っ取られてるんだが？

：おユキさん楽しそうだから、ま、いっか！

そんな日常であったが、少しずつ終末の気配が漂ってくることに、俺は内心焦燥感を覚えるのであった。

第8話：愛で殺したい

「ふひい、ようやく到着だなー！」

江の島付近からスタートして、学校に影響しないようトラポートで帰宅し、翌日はまたトラポートで戻ってMTBを走らせる、を繰り返す。

三日目にして和歌山県に着いた。

いや、転移系スキルがチートってホントだぜ！

新幹線で来てたら、高校生の小遣いなんて一瞬で消えちゃうからな。

んで、和歌山県西牟婁郡すさみ町周参見上戸川。

ここに呪殺系の大物妖怪の伝説が残っている。

牛鬼。

あまりにもメジャーで、山陰から四国が中心だが、全国に広く伝承が残り、漫画、アニメにもボスクラスでの登場が多い。

ここ、上戸川の牛鬼は滝壺に潜み、影を舐められると高熱を発し、数日のうちに死ぬと言いつた伝説がある、まさに呪殺系妖怪。

人払いをして、念のために破邪符をぺたりと額に貼って…。

くっ、呼び出したくは無いのだが…!!

ぴ。

「不吉じゃ。」

とどん、と顔に影を落としたドアップが、眼前に顕現する。

「ぬわああ！毎度毎度心臓に悪い顕現は、やめーい！」

「あいかかわらず肝が小さいのう、お主。そんな事じゃ、女子おなごにモテぬぞ？」

ぐぬ、ぬぬ、ムカつく、ムカつくが、呪殺無効なの、今は錯乱坊しか、居ない。

いざと言うときの身代わり生と考えると、我慢、我慢じゃ!!

それに、あいつの場合、無いとは思いますがラムを見たら暴走する可能性捨てきれんからなあ…(ぼそ)。

”SUMMON DEVIL”

「む。」

二本角の、上下一体型の虎柄スーツを身に着けた、スラリとした長身の物憂げな美青年が、顕現した。

その鼻先に、ビニール袋から取り出した物を、突きつける！

「ぶもおおお〜！！！！」

それを、カ、と、見開いた目で凝視したかと思うと、青年は3mはあろうかと言う牛頭の悪魔に変身した！

涎を口の端からダラダラと溢しながら、血走った目で詰め寄ってくる。

その手に、ぽん、と、吉〇家のつゆだく超特盛牛丼を載せてやりながら、怪物に問う。

「腹一杯食わせてやるから、俺と契約しろ！」

「！、ぶも、ぶも！！」

言うや否や、物凄い勢いで頷くと、牛丼をがつつき始める、悪魔。それを眺めながら、錯乱坊がやれやれといったように肩を竦めた。

「お主も悪党よの。何を、いつからという事を約束しろんのう？」

え、と愕然とした顔でこつちを見る悪魔。

「心配するな、約束は守る！コンゴトモヨロシク、レイ。」
び

「酷い奴じゃの、罰が当たるぞよ、なむ〜。」

「うっせえ、ちゃんと予定はあるんだよ！」

ジト目で見てくる錯乱坊に答える、俺。

順番的には次の次となるが、目星は付けてある、と言うかその為にレイを先に喚んだんだから。

種族：妖獣（牛鬼） Lv10

呪殺反射 破魔弱点 魅了（食べ物）弱点（改善の余地なし）

ムド マハムド 毒ガスブレス 祟り 暴飲暴食

呪殺プロレマ

うむ、これでクソ天使対策が出来たな！

逆に確殺されるかもしれんが（白目）。

錯乱坊へのお供えとして地酒を購入（この頃はまだ緩くて、高校生

がお酒を買っても止められはしない)した後、トラポートで帰宅したのであった。

ところで、どうも俺の悪魔使役は色々可笑しいらしい。

親父曰く、普通のサマナーであれば何とか2体、凄腕で3体召喚出来るか出来ないかで、悪魔の忠誠心を時間を掛けて上げていくのが常道だそうだ。

こんなにポコポコ召喚して、更に忠誠心が高いのは、珍しいを超えて異常な事態なのだとか。

そりやそうだよな、ゲームでも悪魔の忠誠度は重要だったし、召喚数も、確かにゲームでは倉庫的に並べられていたけれど、現実では、しっかりとMAGを与えないと反逆される確率が上がる。

異界からのMAG供給で、俺は楽出来ているけれど、現状の普通のサマナーなら、2体も持てばカツカツだろうな。

それでも数は居た方が対処しやすいので、無理して召喚して寿命を縮める、なんてこともあるようだ。

転生特典なんて、霊格の上昇位しか実感無かったんだが、これが俺のチート、って事かな。

リビングで親父と話していたところ、台所から夕食の準備が出来たとの声が聞こえてきた。

お、今日はカレーか。

配膳を手伝おうとしたが、顕現しているラムも手伝っていることもあり、狭苦しくなるから良い、と言われて席に着く、男衆。

「いただきます。」

さあ食うぞ!

「~~~~~!!!!!!」

一口匙を口に運んだ途端。

口の中に。

太陽が出現した。

口腔の粘膜を焼き尽くすかのような強烈な辛味に、言葉も無く悶える俺の前で、お袋とラムは美味しそうに匙を進めていた。

「お義母さま、どうだっちゃ?一寸甘かったかも知れないっちゃよ。」

「あら、ラムちゃん、良い感じよ？美味しいわ。」

…！

忘れて…いた。

お袋が激辛マニアだった事を!!

そうか、これラムが作ったのか!

いや、味は良いよ、良いんだけど、辛さが、辛さがくく!!

「もう、ダーリンだったら、そんなに震えるほど美味しかったっちゃんね？」

ニコニコしながら俺を見つめる、ラム。

「うむ、美味しいな。」

親父!?

平然と匙を進める親父…だが、口に含む直前、微妙に手が震えるのを、俺は、見逃さなかった。

凄いな、親父。

これが紳士って奴か!

あ、もちろん零はお子ちやまカレーだったぞ。

この日から、週に1回は激辛カレーが食卓に上るようになった諸星家であった。

…こんな生活、いやじゃあくく!!

第9話：女になって出直せよ

「おらおら、足元がお留守になってんぞ!」

「じゃらん!、と鎖が玄さんの足元に叩き付けられる。

「いいやあ!」

それをバク転で躲す、玄さん。

「タイムン中に、悠長に背中向けるんじゃねえ!」

弁天様が、回転途中の玄さんの背中に、ヤクザキックを放つ。

どごん。

「うわあああつ!」

人体が立ててはいけない鈍い音を立てた玄さんが、水平に吹き飛んでいく。

「玄、避ける時は鋭く小さく、隙を見せるな!」

親父の檄が飛ぶ

「はい、所長!」

苦痛に顔を歪めながらも立ち上がる、玄さん。

いやあ、実にスポコンですな。

弁天様は最近、異界でのMACの特訓に、教官役として参加するところが多い。

本人曰く、「体動かさないと、鈍ってしょうがねえ。」、とのことだが、特訓好きの親父が即決で教官として迎えてから、嬉々として玄さんを可愛がっている。

覚醒レベルが上昇してるから、玄さんも一般人からするとかなり頑丈なわけで、一時期の香港映画みたいにポンポン宙を舞うのが、最近の異界のお馴染みの光景になりつつある。

ケガしても、サクラさんお手製の傷薬で回復するので安心安全。

無限特訓コンボが炸裂している訳だ。

そう、異界産の薬草から、傷薬と解毒薬が出来るようになった。

効果的には体力を小回復出来る位と、弱毒状態を解除する程度だが、それでも業界値段は目の玉が飛び出るほどになるので、おユキさんの的にもつこりだ。

いずれ他の組織にも卸せるようになればいいが…、下手に売ると、大手の処から目を付けられるのでタイミングを見計らっているらしい。

しのぶも積極的に手伝っているそうなので、良いスキルが得られることを期待したい。

あ、桃井さん、ジャックランタンをついにお菓子の餌付け悪魔トークで仲魔にすることを成功したんだぜ。

今はコンビネーションの特訓中だが、他の所員もやる気が上がっているらしい。

さて、俺は仲魔ゲットに行ってくるぜ！

「的、お前は後から別メニューだ。」

…ですよね。

ちくせう。

さて、次の目的地に向かう間に昨今の状況について整理してみる。

今、世界各地では不可解な事件が頻発している。

一晩で村の住民が消えたとか、元気だった人が一晩で木乃伊化していたとか。

その不安を煽るように、メシア教が活動を先鋭化しているのが欧州とアメリカ大陸の状況なんだとか。

アフリカはもつと殺伐としており、メシア教による人狩りからの洗脳が報告されている。

まあ、人狩りについてはメシア教側は部族紛争であると主張しており、それがまた嘘でも無い所がアフリカの闇と言えようか。

え、お隣の国？

何もない、と大本営発表してるよ？

日本も不穏な影が濃くなってきた。

霊障事案に対処しているのは、政府系の退魔組織ヤタガラスと、ガイア連合と呼ばれている退魔組織の連合体だ。

ヤタガラスは歴史ある名家や寺社が協力しており、中々の精鋭揃いだ、如何せん政府下にあるため柔軟性に欠けるし、名家同士の確執

や、予算の問題もあり、基本災害規模になりそうな霊障にしか対応出来ていない。

現状の日本の津々浦々で頻発する細かい霊障に対応しているのは、ガイア連合である。

連合と言っても、内実は玉石混交だ。

真つ当な寺院から、グレーを通り越して真つ黒な組織まで属している。

それらが自分の面子としのぎを掛けて除霊をしているのが、地方の現状だ。

一言でいえば、統制が取れていない。

じりじりと上がっているGPに伴う悪魔の格の上昇に、各組織が各自で動き、一致した対策を打ち出せていない。

実際、ウチもガイア連合に所属しているが、時には同じガイア連合のダークサマナーと遣り合っている始末である。

ようは、纏まりがないままに、ガイア連合は播り潰されつつある。

一神教は、と言うと、あまり派手には除霊は行っていない。

日本にエクソシストが少ない上に、日本以外が忙しすぎて対応出来ていないのだ。

それらの隙を縫うように、じんわりとメシア教が勢力を拡大させてきている。

え？

んな怪しげな宗教に引つかかるわけないだろ、って？

オ○ム真○教なんてものがありましたよね、前世。

いや、あのキマツタ目をした人々、怖いなんてもんじゃなかったぜ…。

そんな暗い事を考えながら、目的地に着いた。

京都市左京区鞍馬本町。

いや、もう説明不要でしょ。

天狗、以上。

ラムを呼び出しながら、人除け香を焚く。

” SUMMON DEVIL”

「ワシを喚び出したのは、貴様か？」

頭の両脇に、小さなカラスの羽がある、ややきつめな顔立ちをした黒髪ショートヘアの、艶めかしい黒皮ワンピースタイプのスーツに黒ブーツと言う美女が、顕現した。

「ええ、お美しいお嬢さん、わたし：ちよわ?!」

「ええい、軽々しく触るで無い、軟弱者が!」

その手を取ろうとまたしても体が動いた俺に対し、手にした黒い羽扇を振りぬく!

“ ザン”

目に見えぬ衝撃波を、直前で魔力を肌感じてギリギリで避けた。すると、美女は少し感心したかのように、ほう、と小さく唇を揺らした。

「ふむ、痴れ者ではあるが、鍛えがいはあるようじゃな。よかろう、契約して呉れよう。コンゴトモヨロシクの、サマナー。」

「コンゴトモヨロシク、クラマ様。」

種族：幻魔（クラマテング劣化分霊） Lv10

衝撃無効 雷撃弱点 魅了弱点

とんぼ蹴り ザン 風龍撃（劣化中）ハマ

勝利の小息吹 眷属召喚（弱体化）

おお、ハマ覚えてたか、これは嬉しいぜ!

眷属召喚は、あれか、カラストングだな。

弱体中とあるから1体位だろうけど、限定版のサバトマみたいなものかな？

一応攻撃属性は殆ど揃ったな。

気持ちが爆上げになりながら、一寸大阪によって、温泉少彦名命マークを召喚して帰宅したのであった。

え、温泉マークの扱いが雑過ぎるって？

描写するつもりないから良いだろ!

第10話：体育祭危機一髪：

異界、また広がったぜ！

広さ的には、世田谷区に匹敵するのではないだろうか。

中央の鉱山も300mに達し、採掘量も増えてきている。

山裾の小屋は、一寸した倉庫の規模になった。

だが、鉱石の生産量も上がったのだが、消費量も、上がってしまった。

鏝である。

基本持ち運びしやすいように、使用する弓はボーガンである為、使用する鉄量は低いが、悪魔に当たると汚染されるので再利用は不可能である。

そして、牽制に使用されるため、毎回大量に鏝は消費される。

銃の場合、自分のMAGで包まれるため劣化速度は遅いが、2、3回出撃すれば修繕が必要になる。

結果、周辺の退魔組織が疲弊していく現状、MACがカバーする範囲が広がっているため、作っても作っても追いつかない事態となっているのだ。

通常であれば、悪魔のMAG消耗も急増することになり、不満も溜まるのであるが。

温泉マークの加入が、効いた。

泉質として、MP回復効果と、極々軽い解呪効果があったのだ。

親父の膝も、変身出来るまでは無かったが、杖なしで歩行できるまでは改善した。

これは、飲んでも浸かっても効果があるため、早速おユキさんが、動いた。

世田谷にある、自衛隊中央病院。

ここは、表だけでなく、霊障対策に関している自衛官達の、裏の治療も行っている。

自衛隊が対応できるのなら、退魔組織いらんのでは？、と思うかもしれないが、入隊してくるのは一般人である。

その中に偶々霊能を発現しているものを選抜しているのだが、宝くに当たるレベルで毎年片手に余る程度しか確保できていないし、霊能の素養も低い。

必然、ヤタガラスとの連携必須となり、重大霊障事案にあたる事が多く、隊員の損耗も大きい。

単なる負傷であれば、デイア持ちを確保しているため何とかなるのだが、祟られると現状回復の手段が無かったのだ（イタリアには聖女と呼ばれる解呪が出来る女性が居るのだが、一自衛隊員の為に呼べるようなコネも予算も無い）。

そこに、「呪いを払うのに、効果がある。しかし、当組織の秘薬であるので、使用する際には守秘義務をお願いしたい」とM A Cとして温泉水を売り込んだのだ。

半信半疑であった自衛隊側であるが、ヤタガラスからの「信用がおける組織である」とのお墨付きに条件を承諾して、現代医療では説明不可能な昏睡患者に使用したところ、たちどころに目を開いて病室が上に下への騒ぎになったのである。

現在、病院との協力下に、安全性や使用期限がどうなっているかを治験中で、判明次第購買契約を結ぶ方向だ。

政府が認定したとなると、他にも売りやすくなるし、政府と関係があるとと言う看板は、喧嘩を売ろうという連中にも牽制にはなるだろう。

え、温泉？

露天混浴だから水着着用です（M A C所員も利用するんよ）。

どんなだったか？

…天国だったぜ、ウヒヒ。

色白なおユキさんがほんのりと肌を染めている様とか、サクラさんのメリハリのある色っぽい肢体とか、弁天様の普段は見せない婀娜っぽい仕草とか、ラムのいつもは隠れている項の色気とか、しのぶの控えめだけど健康な水着姿とか、クラマ様のスレンダーだけどグラマラスなボディとか…。

さて、再び大阪から…では無く、和歌山にトラポートした。
四国に渡るため、和歌山港から南海フェリーに乗り込むためだ。
今回目的としているのは、豊穰神。

日本には数柱居る。

豊宇氣毘売神、トヨウケヒメノカミ 宇迦之御魂神、ウケノミタマノカミ 若宇加能売命、ワカウカメノミコト 保食神、ウカモチ 保食神、オオゲツヒメ 大宜都比売。

前3柱は、豊宇氣毘売神の分け神であつたりとほぼ同一視されている穀物神だが、後ろ2柱はなかなかえぐい伝承の神々だ。

保食神は、月夜見尊を口から吐き出した食べ物で饗応して激怒され斬られ、大宜都比売は、須佐之男命を尻から出した食材を調理して饗応して、やはり激怒され斬られている。

ま、普通は怒るわな。

でも、俺は何となくこの2柱、鳥に関連してんじやねえの、って思ってる。

親鳥が雛に給餌するときは口移しだし、卵は総排泄孔、尻から出る。後、古代の酒は口噛みで作つたつて言うから、保食神はそつちからかも知れんが。

まあ、そんなロツクな死に方をした2柱だが、世界中で類型の伝承がみられる、ある奇跡を起こしている。

死んだ自分の体から色々な穀物を生み出したのだ。

所謂、死と再生、食物起源神話である。

特に重要なのは、米と大豆。

異論は認めない。

違いは保食神は牛馬と蚕、大宜都比売は蚕のみを更に生み出しており、食を考えると保食神の方が良いのだが…。

口から吐き出された料理と、尻から出た食材を綺麗に洗って作った料理とでは、まだ後者の方が抵抗感少ないと思わねえ？

思わない奴は、卵食うな。

あ、体のどこからそれぞれ生み出されたのかは自分で調べな。

微妙な気分させられるから。

と、言うわけで辿り着きました、徳島県名西郡神山町。

大宜都比売を祭る神社がある。

まずは、人除けして、と。

び。

「ぶも、ぶももお〜〜!!!!」

レイが怒りを露わに顕現する。

「わあつてる!、これからお前の飯に関する仲魔を呼び出すんだよ!」
迫ってくる顔を押しつけながら、怒鳴り返す。

「ぶも?」

「ああ、だからレイは人型になつとけ!…それと、俺がおかしくなつたら、遠慮なくど突いていいからな。」

ホント?、と聞いてくるレイに指示をする。

” SUMMON DEVIL ”

「貴方が私を喚び出した、だ〜りん?」

ゆるふわなP☆NK HOUSE(この頃は健在だ)系のロリータファッションを纏った、くるつとした肩までかかる赤毛の巻き毛の美少女が、顕現した。

“ マリンカリン ”

「おっ嬢さん、可愛いね!、お茶に…はぶっ!!」

へにや〜ん、と彼女に寄ろうとしたところに、レイのど突きを受けて、正気に返る。

「ここにこ、と微笑む彼女だが…、そうか、食べ物は、尻から出る、か。」

思わず、腰から下に視線が行ったの事に、彼女の形相が一変し、般若の体を様する。

「なんじゃ、われ!? ワシのどこを見腐つとるんじゃ? ああ?」

「レイ! 出番じゃ!」

パチン!、と指を鳴らした合図に、レイが進み出る!

「飯。」

「あら、レイ様って仰るんですね、少し待ってて下さいね♡」

と、輝くような笑顔を見せて言うや否や、後ろに回して、瞬時に前に戻した両手には、山のような食材。

気が付けば、フアンシーなキッチンも出現している。
ちよっ！

大分MAG持つてかれてるんですけど!?

「はい、レイ様、あ〜〜ん♡」

「はぐっ、はぐはぐっ!」

「次はこれです♡」

…うん、リア充爆発しろ、ってこういうときに使うんだな、って心から理解した。

「コンゴトモヨロシクね、だ〜りん。」

「コンゴトモヨロシク、ランちゃん。」

び

種族：地母神（大宜都比売劣化分霊）Lv10

魅了無効 呪殺無効 衝撃弱点

マリンカリン エナジードレイン デイア リカーム

料理（回復食材）の心得 キッチン召喚

…えぐいな!?

魅了からのエナジードレインのコンボが恐ろしいわ!

ボスでも嵌められたら落ちるぞ、これ。

と、言うか俺の天敵だよ（戦慄）。

しかし、これで異界内で米が出来るぜ!

俺は、更なる異界の発展に心を躍らせながら帰宅したのであった。

第1話：真夜中に消えた女

目の前には、水を張った田に等間隔にそよぐ、青々とした苗。稲作、始まったぜ。

流石豊穰伸、二級河川位になった清流脇の、葉草園となった川岸から少し離れて、種々の穀物畑が広がり始め、葉草との境なのか、桑の木が列を成して生えてきている。

気になるのは、時々イナゴが湧くことだ。

アバドンフラグじゃないだろうな？

まあ、幸いなことにヘケトとハンサがパクパク食べてくれるので、群生体になってないから安心なのだが。

いや、待て？

なんでエジプト神とインド神湧いとるん!?

…あ、蛙は猿田彦大神か！

かの柱は、鼻の長さが七咫で、天狗の元祖とされる事もあるのを拡大解釈して割り込ませたな!?

ハンサはあれか、仏教関連の伝承に、白鷺が縁起が良い、と言うのと地藏菩薩を絡めたな？

汚い、流石メガテン世界の神！

…まあ、現状役に立つし、放置するか。

今、異界では結構バラエティに富んだ悪魔が湧くようになってい

る。
ラム関係では、鬼女、オニ、ライジユウ。

おユキさん関連では、雪女、ジャックフロスト。

弁天様は…川縁で、釣竿を垂らしている人影を見たとか。

しのぶは、安定の河童。

クラマ様は、コツパテングが出現した。

レイは、外道関係がちらほらと。

ランちゃんは、今のところ穀物関係だが、淫魔関連とか、フード悪魔が出てくるかもな。

あ、叢と林が出来たら、ピクシーも勝手に湧いてきた。

自由過ぎるだろ、ピクシー。

これらの悪魔に加えてLv10越えのボスが12体。

今の退魔組織では、無理ゲーになってるな、ヨシ！
じゃなくて！

今の現世基準で、ラスダンみたいになっちゃってるよね！

バレたら、粛清待ったなしじゃん！！

ライドウ、来ないよね!?

異界の事は、嚴重に秘する事をMAC所員に徹底したのだが、いずれ漏れるだろうなあ…。

それまでに、実力をつけねば。

てな訳で、ヤタガラスからの依頼に俺も参加することになった。

巷を騒がしている怪事件、「人体蠟化」について協力を求めてきたのだ。

全くの健康だった人が、夜間、路上で蠟人形と化して発見されることが相次いでいる。

スマホがある事から、SNSで目撃者の情報が拡散してしまい、ヤタガラスの隠ぺい工作が間に合わず、社会不安を引き起こし、GPの上昇が顕著になってきている。

早急に事態を收拾させるために、人海戦術で事に当たる方針となり、ウチにも声が掛かったのだ。

これは、絶対に引き受けざるを得ない案件だ。

何故なら、原作に於いて赤井さん、青山さん、桃井さんは、この回で、怪獣の蠟化光線にやられて死亡する。

異界の特訓でLvは上がっているが、予想される怪異の強さから考えると、蠟化を防げるとは思えない。

絶対に俺が、防いで見せる。

そう内心で決意していると、待ち合わせ場所に5人の編み笠を被った僧形が現れた。

「お待たせしたようですな、ヤタガラス旗下、光霸明宗の蒼月紫暮と申します。」

す、と軽く頭を下げながら、総髪の鋭い目つきをした、少し中年に

差し掛かろうかと言う渋いおっさんが挨拶をしてきた。

ん？

光覇明宗、蒼月紫暮…??

うしおととらじゃねえか！

「蒼月さん、久しぶりですね。」

「ああ、諸星さん、此度はお手をかけます。」

にこやかに握手をしてくる、諸星氏。

凄腕の悪魔憑き^{デビルシフター}、何度か除霊の手助けをしてもらったことがある。

だが、つい最近除霊中に膝に呪いを受け、引退状態になったと聞いたが。

思わず膝に向いた私の視線に、諸星氏は苦笑して頷いた。

「大分呪いは軽くなったのですが、まだ変身は出来ません。今M A Cの主力は、私と同じ悪魔憑き^{デビルシフター}の大鳳玄が担っています、玄、蒼月さんに挨拶を。」

「はい！大鳳玄と言います、今日はよろしくお願いします！」

諸星氏が手招きをすると、はきはきとした好青年が私の前に進み出る。

うむ、良く鍛えられているようだな。

ああ、潮もこれ位元気であれば良いのだが。

母が居なくなってから、すっかり暗くなった息子。

役目とはいえ、つらい思いをさせている。

「それと、おい、的、こつちに来い。失礼、息子の的^{デビルサマナー}です。悪魔召喚者として覚醒したので、修練として参加させます。」

ふと思考がそれた間に、諸星氏が何故かこちらを凝視していた少年を連れてくる。

「あ、俺、いや僕は諸星的と言います、今日はしっかりと勉強させていただきます。」

わたわたしながら、それでもしっかりと挨拶をしてくる、的君。

ああ、こちらもよく鍛えられているようだ。

一見頼りなさげな優男だが、体幹に一本芯が通っている。

「ああ、こちらこそ宜しく。して、君の契約した悪魔とは、どのようなものかな？」

まあ、覚醒したばかりだ。

妖精の1体でも契約できていれば、御の字であろう。

「ああ、丁度偵察に適した仲魔がいますよ。」

そう言つて懐からスマホを取り出して、操作する君的君。

瞬間。

息も付けぬほどの重圧が、襲つた。

帯同してきた僧は、耐えきれず膝をついている。

「ワシの出番か、サマナー？」

「ああ、クラマ様、コッパテングでの偵察をお願いしたいかな。」

私ですら冷や汗を隠せない大妖を前に、的君は平然と指示を下している。

クラマ…、まさかクラマテングか!?

愕然とする私の前で、大妖は、つ、と宙に何やら印を結ぶ。

！

ゆらり、と空間が揺らぎ、嘴があり小柄な羽をもつた人影が顕現した。

眷属召喚…！

「良いか、何か不自然なMAGの揺らぎを見つけたら報告するのだぞ？」

「御意。」

ばさ、と翼を羽搏かせ、小妖は宵闇の空に消えた。

これほどの大妖を軽々と従えるとは、彼は安倍晴明の生まれ変わりとでも言うのか？

私の内心の惑乱を他所に、大妖は口を開いた。

「何やら妙な気配がうろついておる様だぞ、サマナー。」

跡良 成子は晴れ晴れとした気分で歩いていた。

彼女は、小さいころから老いを恐れていた、嫌悪していた。

大好きだった祖父母も、年を追うごとに小さく、皺くちやになり記

憶も斑になつていく。

あれは、人の抜け殻だ。

醜悪なものになる前に、残したい、残さねば。

その、身を焦がすような焦燥は、年々膨れ上がり。

「その希望、叶えてあげようか？」

耳元で、囁かれた。

素晴らしい。

まず、両親を変えてあげた。

今もキツチンで私を微笑んで待っていてくれている。

素晴らしい！

次に、彼を変えてあげた。

いつも、私を両手を広げて受け入れてくれる。

なんて素晴らしい!!

この幸せを、他の人にも分けてあげなければ。

今日も私は、皆を幸せに変えてあげている。

「そんな女人、一寸宜しいか？」

ほら、また幸せになれる人が来た。

私はニツコリと微笑みながら振り返る。

小妖からの報告を受けて、私たちは現場に駆け付ける。

く、MACは如何な鍛錬をしたのだ、私以外は遅れがちになつてい
る。

む、向こうに白いワンピース姿の女人が見える…、が、なんだあの

醜怪な気配は!?

近くまで気配を殺しながら駆け寄り、声をかける。

ゆつくりとすすり泣く様な不快な声を上げながら、振り向く、女。

どんよりと濁った瞳と、三日月のように吊り上がった歪な微笑みを
浮かべながら、胸元の黒百合のコサージュが不気味な閃光を…!

しまっ!?

先手を取られたのだと反応する私より前に、的君が叫んだ。

「錯乱坊くく!!」

「わかつとる、マハラカーンなむく。」

あれは、まさか地蔵尊!?

その高位悪魔から放たれた結界は、私たち全員を包み込み、閃光を跳ね返した!

「ぐ、があああああああああ!」

女性が、苦悶に悶えながら見る見る長い白髪 of 全身に鎧を纏ったよ
うな怪異に変化する。

何という判断力だ、それに複数の高位悪魔をしたがえているとは!
舌を巻きつつ千法輪を構える私の隣で、大鳳君が叫ぶ。

「レオ~~~~!!」

赤き閃光と共に、依然見た諸星氏と雰囲気が似た悪魔に変身する、
大鳳氏。

同時に異界化を成すとは、練れている!

それを横目に、法力を注ぎこんだ千法輪を怪異に投擲する。

合わせるように、怪異に滑るように近接し、拳を叩きこむ大鳳氏。
うむ、流石だ!

理想的な連携となったそれはしかし、怪異の鎧のような外皮に傷一
つ付けられず弾かれた。

「バカな!」

思わず呻く。

固すぎる。

法力僧の攻撃も、MAC所員のボーガンの攻撃にも、びくともして
いない。

と、

「おりゃああああ!」

的君が、大槌を怪異の胸に叩きこむ。

「があああおん!」

!、怯んだ!?

「蒼月さん、玄さん、あの胸の花が弱点だ!」

「!、陣を敷くぞ、大鳳君あとは任せる!」

ぎ、と法力僧と共に、怪異を五芒の陣で囲み、金鉈杵をがす、と地

面に差し。

「縛！」

結界で怪異を縛り付ける！

「今だ、大鳳君！」

『へアー！』

頷いた大鳳氏が、両手に靈力を集め放った!!

「ぎいやああああ!!」

地面に崩れ落ちる、怪異。

人間の姿に戻っていくが…四肢の先端から崩れ落ちていく。

悪魔に、全て飲み込まれたか。

「どうして邪魔するの…、私は、皆に幸せをあげてるのに…？」

心底理解できないと言う表情で見上げてくる、女。

「そうだよなあ、年は取りたくはないよな。でもなあ、お嬢ちゃん、息子が生まれた時、少しづつ大きくなる時。その変化が嬉しいんだよなあ。人が年を取らず、変化しなくなった時。それは、感情すら忘れた化け物なんだろうなあ。」

「わからない…わから。」

さら、と女は崩れて消えた。

蒼い月が、見ていた。

第12話：海が好き！

あれからヤタガラスからの依頼が増えた。

なんか蒼月さんが俺を気に入ったらしく、指名で仕事が入る。

精鋭である蒼月さんとの除霊は、Lv10前後が多く、大いに仲魔の強化にも役立つている。

依頼の度に、事前情報から組み合わせを変えているのだが、その都度蒼月さんが無言になるのは、何なんだろうか？

そんな仕事中に、色々教えてもらっている。

ヤタガラスとは、皇朝が開闢した頃から存続していると言われる、鎮護国家を在り方とする除霊組織で、代々の政権と密接に関わりながら現代まで続いている。

光覇明宗は、平安の頃に大陸より飛来したある大妖を封じた組織で、少し政権から距離は取っているが、衆生救済の理念でヤタガラスと連携を取りながら除霊を行っているのだそうだ。

封じた、ねえ。

まあ、あれは獣の槍が無いとどうしようもないから、協力はするけど、任せるしかないな！

適材適所じゃ。

因みに、次期ライドウ候補はいる、そうだ。

伝聞系なのは、葛葉一族と言う、結界に閉ざされた里の退魔を生業とする一族の頂点なのだが、蒼月さんも一度も会ったことは無い、と言う。

一説には、溢れ出すとこの世を地獄と化す異界に籠り、間引きを続けているとか。

なにその戦闘狂。

「ぶえつくしよん！」

「え、大丈夫、古屋君？」

「なんでもねえ宗谷、誰か噂でもしたか？」

「古屋、貴様除霊の最中で気を抜いてるんじゃない！」

学生服の男女と、何故か黒スーツの美少女が、女性型の怪異と相對

している。

周囲には、怪異に対処していた霊能者が倒れていた。

怪異が学生服の少年に飛び掛かり、伸びた爪で突きかかる。

「くっっ！」

少年は掌に霊力を載せ、その爪を受け止める。

「今だ、烏丸！」

「ふ、任せたまえー！見えているならー！」

スーツの美少女が印を結ぶと、

縛！

と、怪異の動きが止まる。

少年は、己の眼に霊力を注いで、怪異の霊脈を、暴く！

ぽつり、と一点、光る霊的秘孔。

「宗谷！」

「任せて！」

学生服の少女は、符を投げて、倒れ伏している霊能者の目と耳をふさぐ。

「いまだよ、古屋君！いつちやって、テクノレレイカー絶頂除霊！」

「大きな声で、言うなー！ー！！」

「んほおおおおお！！！」

ある日の、次期ライドウ候補の一コマである。

んお!!?

なんか今、ライドウに俺の仲間、絶対に合わせちゃいけないって、霊感が囁いた気がする!?

そんなこんなで俺も仲魔もLv15位に上昇している。

異界も、恐らく東京都を広さでは超えたであろうか。

フード悪魔も湧いてきた。

イナバシロウサギ。カタキラウワ、マメダヌキ、クダ。

オンモラキとチュパカブラは、ランちゃん的には食材と判定されなかつたらしく出現していない。

…ああ、輸送手段の確保として、因幡は召喚したよ（ぼそ）。

鍛冶小屋程度であった、面堂兄妹のボス小屋も、豪華な洋館程度に発展している。

仲間達は、主にそこで寛いでいるようだ。

そんな状況で、俺は今、福岡の海岸線をMTBで疾走している。

「ダーリン?」

そんな俺の横を潮風を受けながら気持ちよさそうに飛翔していたラムが、こちらに顔を向けた。

「何じゃ?、ラム。」

「結構充実してきたと思うっちゃけど、まだ足りないものがあるのけ?」

疑問を浮かべるラムに、悪魔じゃ分からんか、と苦笑する。

「今走つとる右に何がある?」

「海だっちゃね。」

当たり前のことを言われて、キョトンとする、ラム。

「ああ。だが、人間は、ここから取れる塩が無いと、生きていけない。」

「!、それも、そうだったちゃね。」

一日に必要なとされる塩分量は、約7.5g。

少ないと思うだろ?

日本人全体で考えてみる。

約900トン。

最低限で、そうなる。

終末を迎えた時、地球の海は、それまでと同じ環境なのか?

それを考えると、絶対に確保すべき資源である。

そんな事を、ラムに説明すると、

「人間って、脆いっちゃね…。でも、安心して良いっちゃよ、ダーリン、死んだら魂はウチがしっかり受け止めてあげるっちゃ!」

と、ニツコリと微笑んできた。

「だあゝゝゝ!死後まで捕まるなんて、まっぴら御免じゃゝゝゝ!!」
「ん、もう、ダーリン、待つつちやあゝゝゝ!!」

で、到着しました、福岡県志賀島。

島って言ってるけど、橋で陸続きで、サイクリングにも最適だよ、風

強いけど。

ここに、結構なパワースポットを誇る神社がある。
まず、参道。

なんと、日本全国の龍がこの参道を通って行くという。
なので。

人除け：平日だから必要か疑問があるが、一応して。

”SUMMON DEVIL”

「俺を呼び出したのは、お前か。」

学ラン姿で、短髪の美少女が、顕現した。

「もちろんです、お嬢さん。私の仲魔になって頂きたい。」
す、と彼女の手を取ると。

「え、あ、ちよ!?!」

と、慣れていないのか観面に顔を赤らめる。

「だくりん!!」

後ろから、ラムが、ちよつと待て!

「ちよ、ラムそれマハジ…!」

「あ。」

「あばばばば!!」

ラムと二人、平身低頭して契約にこぎつけた。

「コンゴトモヨロシクな、サモナー!」

「コンゴトモヨロシク、藤波 竜之介。」

び。

種族：龍神（青龍劣化分霊）Lv12

衝撃耐性 氷結耐性 雷撃弱点

空間殺法 ザンダイン マハザンマ

衝撃プロレマ 龍の反応 貧乏

なんか、流石龍神って感じだよな（貧乏から目反らし）。
さて、とつても、気が進まないのだが。

この神社の主神を呼び出すとしますか。

”SUMMON DEVIL”

目の前に、何も顕れない。

海鳴りが、聞こえる。

ノースシヨアのビッグウエーブはかくもあらん、と言う波に乗るは、ステテコ半袖の、親父。

「海が、す…」

「撃ち落せ、ラム〜!!!」

「ジオダイーン!」

「あばあ〜〜〜!!!」

塩資源、ゲットだぜ!

第13話：美しいおとめ座の少女

キーンコーンカーンコーン

異界にチャイムが鳴り響く。

今や一級河川ほどに広がった清流の土手傍に、よくある鉄筋3階建ての校舎と体育館がある学校が出現していた。

銘板には「友引高校」と記されている。

竜ちゃんを召喚した後、俺は佐賀に行き、炬燵を餌にコタツネコ化を喚び出し、その縁を利用して、大宰府で校長先生菅原道真を喚んだのだ。

そして異界で校長先生を再召喚したら、によきによきと校舎生えてきたんだわ。

当人は校長室でコタツネコとのんびり茶を嗜んでるけど、いや、ビッグネームは流石凄まじいな！

因みに校舎内で勉強すると、学習効率大幅上昇の加護が付く。受験生垂涎だろ？

まあ、前提として覚醒してないと、異界のMAG濃度に耐えきれないんだけどな。

親父は、ここの校庭で所員を扱くのが最近の日課だ。

何しろフィールドが自在に変更できる上、訓練悪魔には事欠かない。

にっこにこで玄さん達への特訓三昧である。

お蔭で、MACの事務はおユキさんが全て回すようになってる。

営業実績は右肩上がりなんだとか。

：乗っ取り完了だな（呆れ）。

所員達も所員達で、異界に住み込み始めている人も出てきているとか。

具体的には、桃井さんなんだが。

彼女、メキメキと腕を上げ、ピクシーとジャックフロストをまたお菓子で餌付け新たに仲魔にしたんだが、「いつでも触れ合っていたい！」と、用務員室に泊まり込んでいる。

んで、異界の温泉に毎日入ってるもんだから、お肌艶々で、最近お

袋も異界への引越しを真剣に考えている。

あれ？、終末まだ来てないのに、もう引き籠りの展開になってる？
首を傾げながら、ラムと保健室の扉を潜る。

「ちわーす、サクラさん、爺さんの調子、どう？」

「おう、諸星か。もう心配はいらんぞ。」

ぎしり、とデスクチェアを軋ませながら振り向くサクラさん。

その視線の先には、ベッドに横たわる死神博士にそっくりな老人と、それに寄り添う女性が居た。

玄さん達がパトロールしていたところ、メシア教徒に襲われていたところを救出したのだが、普通の病院では、メシア教徒の襲撃の恐れがあるため異界に連れ込んだとの事。

あのさあ…、秘密厳守って言ったでしよう!?

玄さん？

今親父の猛特訓説教中だよ。

「すみません、祖父を助けていただいて。」

こちらに頭を下げてくる、女性。

うくむ、一寸奇抜な服装（頭に銀色のバンダナ？と着け、つるんとした材質の緑のワンピースに白い手袋）をしているけど、人間にしか見えんな。

「のう、諸星、この女人、人でも、悪魔でも無いな？」

女性を観察していた俺に、サクラさんが声を響めて聞いてくる。

「あ、サクラさんも分かっちゃうよね？MAGが全く感じられないもんな。」

「ええ、そうだったのけ!？」

そう、人であれ悪魔であれ、存在するためには僅かであっても持っているマグネタイトが無い彼女は。

原作通りであれば、ベッドに横たわっている老人が作り出したアンドロイドだ。

「う…、こ…こは…?？」

「お爺ちゃん、気が付いたの!？」

呻きながら目を開き、身を起そうとする、老人。

女性はすかさず老人を支えようとする。

「ご老人、無理をするではない。怪我は癒えて居るが、体力は戻っておらぬわ。」

「一、貴方、は…、随分と高位の悪魔なようじゃが、何故私たちを助けてくれたのです？」

サクラさんに注意された老人がそちらに視線を向け、途端彼女から発せられる気配に蒼白になりながらも、質問して来る。

「ふむ、それはワシの役目ではない。諸星、任せたぞ。」

それを、俺にパスするサクラさん。

まあ、しゃあないけど。

「偶々、本当に偶然にウチの管轄の見回りをしていた所員が、爺さん達がメシアン共に襲われているところを助けただけなんだよ。ほんで、お人好しなことに、ウチの秘匿異界に治療の為に連れて来たってワケ。」

俺は肩を竦めながら説明する。

「で、爺さん達は何でメシアン共から追われてたんだ？言つとくけど、ダンマリはお勧めしない。」

続けて、少し霊圧を加えながら、爺さんを睨む。

「わ、分かっておる…。わしらでは全く歯が立たんじやろうしな…。」

「おじいちゃん…。」

話を纏めると、爺さんの名前はドドル。

欧州某所で、ロボット開発のチームのトップに居たのだが、実はここはメシア系列の研究所だった。

ドドルは、古くからゴーレムを研究していた家系であったが、霊能を持ちつつも科学との融合を見事に成し遂げたある偉大な霊能者に触発され、人工靈魂の研修をしていた。

そこに救世主計画プロジェクトメシアが目を付けた。

穢れた人から生まれたのではなく、無から生み出される魂は純粹である。

それを核にしたアンドロイドであれば、メシアの器として相応しい。

…狂ったやつと言う事は分からねえ…。

当初は純粹にアンドロイドを造ることに邁進していたのだが、途中でメシアン達の最終目標、今ある世界を滅ぼして千年王国を築く、を知り、自分の創造物、いや、最早子供同然のアンドロイド…カロリンを悪用させないために隙を見てドドルは脱走したのであった。

目指したのは、メシア教の影響が比較的少ない日本。

国境はメシアンが管理側に潜り込んでいる可能性があるため（欧州ではそこまで浸透しているらしい）、カロリンに背負ってもらって道なき道を突破し、途中野良悪魔から身ぐるみ剥がして、現地ダークカオス勢に売り払い路銀を稼ぎ、ブローカーに繋ぎを取って、日本に渡ったところで日本に潜伏していたメシアンに発見され、今に至る。なるほど。

爺さん、密入国者じゃん!?

思わず頭を抱えた俺の前に、おユキさんがトラフリーで現れた。

「申し訳ありません、あたるさん。私では判断できないお方が訪問されました、お義父様はどちらに？」

珍しく、困ったように眉を顰めながら俺に述べる、おユキさん。

「どうしたのかな、おユキさん。困った事があったら、何時でも言っているいいから。」

にこやかに、背中にひりつく様なラムの視線を感じながら俺が言うと、おユキさんは、小首を傾げながら、言の葉を載せた。

「ドクターカオスと名乗ってる方が、責任者への面会を求めておられるのですが。」

は？

第14話：Drカオスの挑戦!

「おお、寅屋の羊羹ではないか!!10年ぶりの!」

応接室のソファで、がつつく様に羊羹にかぶりつく、黒いインパネスコートを纏った背の高い老齢の白人男性。

その後ろには、毛先が跳ねた特徴的な赤毛のショートヘアで、アンテナが付いたヘアバンドをしている、眉一つ動かない無表情な翠眼の美女が佇んでいる。

：うん、ドクターカオスだわ。

「それで、ヨーロッパの魔王と名を馳せた貴方が、わがMACにどのような用件で?」

羊羹を食べ終わって、カオスがお茶で一服したところを見計らって親父が尋ねた。

「なに、貴様らの所に、面白いものが転がり込んだようじゃの?」

にやり、と歯をむき出して笑う、カオス。

どこで、其の事を：!?

「：何の事ですか?」

「くかかかか、父親の方は流石じゃが、小僧の方は全然じゃの。顔に出るとるわ。」

くそ、表情殺したつもりだったが、ダメダメじゃねえか、俺。

不穏な気配に、護衛として場に召喚していたラムとおユキさんが気色ばむ。

カオスの後ろの美女も、す、と両腕を上げる。

「止めい、マリア。安心せい、敵対しに来たわけではない。このワシ以外で人工靈魂を持った存在を生み出したのは2例目じゃ。魔導科学者として見逃せまい?」

ぎろ、と目をむき出して身を乗り出してくる。

「マリアと比較するだけでも、新しい技術が生まれるかもしれんのだじゃ!協力してくれればそちらにも利益があるぞ?」

にたり、という笑みを浮かべて提案した。

あく、成る程。

「借金返済の期限近いんだな、カオスの爺さん。」

「ぐはっ!!」

ぼそり、と呟いた俺の言葉に、胸を押さえてひっくり返る、カオス。

「こここ小僧、何故それを知っておる!？」

「いえ・ここら辺の・金融機関では・既に・ブラックリスト入り・して
るのは・有名です・ドクター。」

「げふう！」

がば、と身を起して訪ねてきたカオスに、悪気無くマリアが止めを
刺した。

ぴくぴくしているカオスに、じつとりとした視線を送る、ラム達。

しかし、ボケが始まるとはいえ、最高峰の魔導科学者は、終末
を乗り切るためにぜひ確保しておきたいが…。

あ、学校のあの機能を使えば、行ける、か？

「お、おおおおお…!!」

カオスの手の中で、凄まじい勢いで編まれていく、本。

この「友引高校」の図書室では、校長先生菅原道真の権能により、知識を本
に編集することが出来るのだ。

この話をしたとき、カオスは歓喜していた。

不完全な不老不死化により、徐々に老化しており、また脳の記憶容
量も使い切ってしまったため、覚えるそばからとろてん方式に抜け
落ちてしまう状態になっていた。

書物として書き写そうにも膨大過ぎて、借金返済のバイトに明け暮
れる身として時間が無い。

それが、解決するとういうのだ。

喜ばないはずは、無い。

オマケにこの本、検索機能付きで調べようとする事を考えて捲る
と、その項目が表示される便利仕様。

さすが学問の神様、受験生に優しいぜ（ただし普通の受験生は異界
には入れません）。

「くかかかか、小僧！大層な借りが出来たな！しっかりと返すので期
待しておれ！」

ば、とコートの裾をはためかせながらが図書室から出ようとするカオスに、俺は声をかけた。

「待ちな、カオスの爺さん。」

「なんじや、小僧？まだなんか用があるのか？」

振り返るカオスの鼻先に、ビシッとカードを突き付ける。

「図書室からの本の貸し出しには、図書カードへの記入が必要だぜ。」

そう、この図書室で作られた本の所有権は学校にあるのだ。

また、貸出期限もあるため、定期的にこの異界に來なければならぬ。
い。

借りパク？

日本三大怨霊の校長先生菅原道真にそれやるの？

まあ、実際のところ定期的に図書室に來ないと消滅してしまうし、なにしろ此処では最新知識へのアップデートも出来るから、自発的に來るだろう。

「と言う事で、管理は任せませ、マリアさん。」

「イエス・ミスター諸星・お任せください。」

「小僧、何故ワシに言わん!？」

だって、信用できねえもん。

「おお、貴方がドクターカオス:!!」

「くかかかか、そうかワシの研究を参考にしたのか!」

早速引き合わせたところ、盛り上がる爺さん達。

なんかあそこ、悪の組織感たっぷりなんですけど。

「ふむ、やはりネットワークは材料か。」

「ですな。私はメシア教が用意した聖遺物をなどを用いましたが、神秘の薄れた現代では中々:。」

二人は、人工靈魂のアンドロイドを再び作成しようとしているようだが、直ぐには実現できるものではなく、またその資金も無い。

だが、俺にはある程度すぐに実現出来るものに心当たりがあった。
「なあ、爺さん達、彼女達の眼は、オカルトを認識できてるんだろ?その機能だけをヘルメットに付加出来るのか?」

靈障被害が大きくなってきているのは、自衛隊などの国の防衛組織

にオカルト存在を認識できる者がほとんどおらず、部隊規模で対応出来ないことによる。

その為、徐々に上がるGPに霊障の悪質さが上がるに対し、要所を守る事しかできず、地方への対処が間に合わなくなり、地方の退魔組織が疲弊していく。

悪魔は、認識さえすれば攻撃できる。

非覚醒者の攻撃はさほど効かないかもしれないが、数で対応すれば低級な悪魔を倒せる可能性もある。

「なるほどのう…、その程度の仕掛けであれば、非覚醒者のMAG量でも問題なさそうじゃ。」

領きあう、爺さん達。

その日から理科室に籠ったのであった。

なんと、僅か三日で試作品を上げてきた。

非覚醒者のMACの事務員さんで確認したところ、おユキさんを認識出来たのである。

早速、自衛隊中央病院に出来た伝手で「こんなもの、ありますが」と、伺いを立てたところMACに担当者がやってきた。

「本官は、防衛庁技術研究本部特殊事案対策部隊所属の五島公夫三佐と申します！」

どうして…。

第15話：しんめがみてんせい・に？

「ああ、これは良いものでありますなー！」

制服の上からでもはち切れんばかりの筋肉が伺える五島三佐、うつきうつきしてます。

現在、ウチの事務所にて、非覚醒者の自衛隊員に桃井さんの仲魔のピクシーが認識できるかを試しており、全員が認識できたという報告を受けたところだ。

五島三佐？

もちろん覚醒者だよ。

それも。

霊能者の家系じゃない、一般家庭からの覚醒なくせに、その霊力は名家の上澄みにも達する位だと噂されているとか。

だからこそ、現状を憂いていた。

彼の所属する技術研究本部特殊事案対策部隊は、甚大な災害などに対応を試験検討する部隊と対外的にはされているが、霊障事案に備えて設立されたものだ。

だが、霊能組織の名家は自衛隊に入隊するはずも無いため、入隊した中から三流程度の才能でも掻き集め編成した隊なのだそうだ。

当然、今のGP増加による出現悪魔のLv上昇に着いていけるはずもなく、徐々々に播り潰されていく現状に切齒扼腕しているばかりであつたのが。

「貴方達のお蔭で、状況が変わりました。」

ニッコリと、幼児がひきつけを起こしそうな笑顔で五島三佐は述べる。

「中央病院に納入していただいたあの秘薬^{温泉水}。あれのお蔭で現場復帰が出来る隊員が増えました。さらに、あれを飲むと疲労感^Mも回復^Pする。実に助かっております。そして。」

五島三佐は、ピクシーを認識出来て興奮している自衛隊員を眺める。

「悪魔を認識出来れば、出来る幅が広がります。直接相対する事が出

来なくても、支援射撃や遅滞戦術。それだけでも、前線の負担は減るのです。…有難うございます。」

「と、五島三佐は惚れ惚れする様な敬礼をしてきた。」

「それで、今後の装備品の納入などについてですが…。」

「と、五島三佐に随行してきた事務官と思われる男性が口を開いた。」

「ああ、その件に關しましては、こちらが担当になります。」

「と、おユキさんを指し示す、親父。」

「な…！悪魔が、商談をされるんですか!!」

「?????」

愕然とする五島三佐と、何言ってるんだお前、な事務官。

「がぼん、とヘルメットを被せると、

「んなあ!」

と、仰け反って驚いている。

「うふふ、宜しくお願いいたしますね?」

俺の隣で、それはそれは綺麗な微笑みを、おユキさんは浮かべた。

後に、五島三佐は語る。

「悪魔、怖い。」

ヘルメットの生産に関しては、パテントをウチが持つて、コア部品をブラックボックス化してノックダウン方式でスリーダイヤモンドの企業が請け負うことになった。

ブラックボックスを開けたら?

世界最高レベルの頭脳と日本最高級の怨霊がタッグを組んだ呪いが巻き散らかされますが、何か?

ああ、もちろん戦闘中の破損はノーカンだから安心してくれ!

利益?

カオスの爺さんがスキップして帰った、つてので察してくれ。

なにしろ部材にもウチの異界産の鉱石が使われてるからな。

大きな商談が纏まったのを祝して、異界の海岸でバーベキューを行った。

食材は、主にこの異界で採れたもの。

肉は、豚と兎が主体で、海産物と、野菜は結構種類が充実している。

あ、こらラム、タバスコぶつ掛けるのは、自分の取り皿だけにしろ！
竜之介ちゃん、マツカ稼ぎの屋台出さない！

あああ、サクラさんと錯乱坊に、レイとカオスの爺さん！
バーベキューは食い大会じゃない！

弁天様も、コタツネコを対象としたマツカ賭け相撲場所、開催しないで！

こら、塩土老翁メガネ！

得意の（役に立つかわからない）蘊蓄で悪魔焚きつけて、（ラムを奪うための反逆に）導くんじゃねえ!!!

ぜはく、ぜはく、と息を切らせていると、ラムがニコニコしながら上から覗き込んで来た。

「楽しいちゃね、ダーリン。」

その言葉に、周りを見渡すと。

赤井さんは、猫又にでれっでれになっているし。

青山さんは、ライジユウに纏わりつかれて「あばく！」になつてるし。

桃井さんは、仲魔達にお菓子を与えるのに夢中だし。

北山さんは、普段顕現出来ないニケとまったり良い雰囲気だし。

親父は、玄さんを特訓している。

一神教が見たら、怒髪天を突くくらい怒り出すんじゃないか。

でもなあ、人間にも、吐き気がするほど邪悪な奴がいるし、絶対に

裏切らない人間も殆どいない。

要は、付き合い方なんだよなあ。

あそこでまったりとしているMAC所員の皆さんも、退魔組織に所属しているだけあって、死は常に覚悟している。

その上で、悪魔をパートナーとして戦いに赴く選択をした。

当然裏切りのリスクも承知で、その可能性を低くするためにコミュニケーションをすることで忠誠心を上げようとしているのだ。

一部趣味と実益を兼ねてる人も居るみたいだけど。

「そうだな。まだ満腹じゃないし、食うか！」

美味しそうに焼けた豚バラ串を取ると、齧り付く。

うん、俺の手が届く範囲だけでも、こんな風景が続いていけるようにしなきゃな。

一生懸命料理をタッパーに詰め込んでいるマリアさんから、武士の情けでそつと目を逸らしながら決意を新たにした。

「最近MAC、羽振りが良い様じゃねえか。」

「気に入らん…。」

「葉漬シヤブけた餓鬼えきどもを生贄えさにして、悪魔を喚んで…。」

「やるか。」

第16話：MAC全滅？円盤は悪魔だった？

そう言えば、玄さんの弟の嗣寅さんが見つかった。

間限の襲撃の際に重傷を負い、大鳳流空手の弟子に匿われていたのだが、ようやく傷が癒えMACに合流したのだ。

彼も悪魔憑きデビルシフターで、アストラと言う悪魔シフトに変身する。

どうも魔界でもレオと関係が深いらしく、強力な合体技があり、除霊に活躍している。

この間、ついに仇の間熊 成人を二人で倒したそうだ。

ヤタガラスからの依頼も、所員達の実力が上がるにつれ重要案件が回るようになって来ている。

自衛隊へのヘルメット納入も進んでいるが、ブラックボックスの生産量がボトルネックとなり中々全部隊への配備には時間がかかる見込みだ。

いつその事パテント料を貰って、全てスリーダイヤモンドへ全部生産を任せることも、おユキさんは検討している。

何しろ、あのマッド二人、開発したい研究が次から次に湧くらしくブラックボックスを生産する時間も惜しいらしい。

実に順調だな。

黒井STAR商事は中堅として少しは名の知れた会社である。

なんでも調達してくれると評判なのだが、裏ではそれこそ銃器から麻薬、人身売買まで手掛ける、違法退魔士御用達の会社だ。

社長は黒井 四礼。

彼は今、会社の所有する町外れの倉庫へと護衛を連れて来ている。夜も更けており、人気のない倉庫の裏手の鍵を開け中に入る、黒井達。

倉庫に入った途端、むわっと匂う、汗やら精液やら尿やらその他もろもろの体液が混ざり合った生臭い匂い。

目の前には、十数人の男女が裸で纏れ合いながら痴態の限りを尽くしていた。

彼らの眼は、酒と薬で濁っており、正気の欠片も無い。サバト。

由緒正しき、悪魔召喚の儀式が繰り広げられていた。

護衛がうえ、と言う顔をする中、黒井はその醜悪な光景を、ふんと鼻で笑い、徐に呪文を唱え始めた。

と、床に隠された魔法陣が反応し、光を放つ。ゆらり。

空間が揺らぎ、銀色の、蝸のような、海月のような、花のような触手を含めると3 m程の悪魔が顕現した。

と、悪魔は花卉が開くように倉庫一杯に広がり、召喚時に大量のMAGを奪われたことで半死半生になった男女を飲み込んで…溶かしながら吸収していく。

蒼褪める護衛達を余所に、黒井は満足そうに頷いた。

「これなら行けるな。待っているがよい、MACよ。」

黒井は当初、MAC等と言う弱小組織に関心は無かった。

だが、最近所属する人員の除霊の腕が上がって来たのか、これまで黒井STAR商事が独占してきた訳あり除霊に食い込み始めてきた。

更に、どうやったか自衛隊とのコネを作り、金回りも良くなっている。当たりの異界を引いたな。

MACが秘匿しているそれに、黒井は、金に異常なまでに執着した性格により霊能にまで昇華したカンによって正解に辿りついていた。

異界の詳細は分からないが、あのようになちな組織に任せるには勿体ない位の豊潤な金の匂いがする。

「私が、上手に利用するのが、筋だよなあ?」

くつくつと喉の奥であざ笑い、黒井は倉庫を後にするのであった。

「あれ?、おユキさん珍しいねこっちいるの。」

一寸カオスの爺さん達との打ち合わせに学校に来たところ、季節を忘れたように咲いている桜の下に緋毛氈を敷いてお茶を楽しむおユキさんを見つけた。

「ええ、今日は事務方の誕生日とかで、私が居りますと霊圧で楽しめな
いかと。」

そう、令和の頃ではあまり聞かないが、この頃は小さい会社だと職
員さんの誕生日を開いたりしていた。

「へえ、誰の誕生日だったのけ?」

ラムが尋ねる。

「松木さんのお誕生日ですわ。」

「ああ、彼女だったちゃね。」

一応事務の人たちにはあのメットを被ってもらい、俺の仲魔達と顔
合わせしている。

大分腰引けてたけどな。

そっか、松木さんの誕生日か…、松木さん?、松木さん!!!?

ヤバい、ヤバい!!

あの、全国のちびっ子を悪夢に叩き込んだ回じゃねえか!!

M A Cの事務所では、和やかに松木所員の誕生日が行われていた。
手作りのおめでとうメッセージボードに紙製の花が飾り付けられ、
誕生ケーキの蠟燭を吹き消してはしゃぐ、松木所員。

皆でドリンクを手に取り、乾杯をしようと掲げた、その瞬間。

窓の光が遮られるや、パリンと破られ、室内に流れ込む、怪しげな
煙。

吸い込んだ者から、喉を掻きむしり、血を吐きながら倒れ込
む。

追い打ちをかけるように、溶解ブレスが散布され、じわりと溶けて
いく、室内。

弾や、玄にもどうすることも出来ない。

咳込みながら、脱出を図るのみ。

「錯乱坊くくく!!」
チェリ

「うむ、南無く。」
テトラカーン

ぱあっと、澄み渡る、室内。

「サクラさん、ランちゃん!!」

「任せい、サマリカーム。」

「は〜い、だーりん、常世の祈り。」

床に倒れ伏し、絶息、または虫の息であった者たちは安定した呼吸となり、顔色を取り戻す。

「親父、呪いも解けたはずだ!」

「む、デユワ!」

「レオ〜!」

輝く閃光と共に変身し、ファイティングポーズをとる、二人。

「あらあら、やってくださったものですね。」

びつくう、っと二人の背が震える。

「この損害の貸しは、安くありませんわよ?凍りなさい。」絶
対
零
度

FREEZE!

怪異の巨体に、霜が降り、硬直する。

「さ、お義父様、玄さん、止めは任せましたわ。」

そのおユキさんの声に、はっ、と自分を取り戻し、セブン親父は頭の鶏冠に両手を沿えると、

『へア!』

万
能
・
衝
撃
貫
通アイスラッガー!

凄まじい速度で飛翔した鶏冠は怪異を切り裂く!

『イヤア!』

その傷に向けて、必殺の物
理
貫
通レオキック!

怪異は、MAGの残滓を残して消滅したのであった。

滅茶滅茶になった室内で、倒れ伏した所員達を介護して回る。

「大丈夫ですか?」

「どこか痛むところはないっちゃ?」

「ふむ、念のためこれでも飲んでおれ。」

「具合が悪い所があったら、教えてね♡」

一人一人確認して回る皆であったが、一か所には決して目を向けようとはしなかった。

「うふふふふ、この負債、どうやって取り立てましょうかしらね?」

おユキさんが、荒らされまくった室内を眺めて、右手を頬に添えな

がら絶対零度の微笑みを浮かべていたのだから。

「続いてのニュースです。今日、黒井STAR商会に捜査令状が出されました。容疑は恐喝、暴行、殺人、銃刀法違反、麻薬取締法違反、人身売買です。事件の全容を知るとみられる黒井四礼社長については現在行方が分からなくなっており、警察ではその足取りを追っています…。」

「あらあら、大変ですわね?」

お昼のニュースを、以前より豪華になった休憩室のソファでお茶を嗜みながら見る、おユキさん。

余談だけど、黒井社長の足取りは完全に消えて、多額にあったとみられる裏金も見つからず、海外逃亡したとして世間からは徐々に忘れられていったぜ…。

第17話：Level ？

M A Cの所員は、あの襲撃事件で全員覚醒を果たした。オマケに何故か財務状況も改善している。

L vも、俺は18、親父や玄さんは15、戦闘系所員さんたちは7と8、事務系は2と3と中々（注1）強化されてきている。

そんな中、異界での修行で焙り出された問題は。

悪魔が鑑定できない事。

アナライズのスキルに目覚める所員が、居ないのだ（注2）。

なので、今までのデータからの推測と、最初に弱めの属性攻撃でアタリをつける、と言う迂遠な行動をとるしかない。

アナライズからの属性確殺奇襲攻撃なんて、夢のまた夢、な状況だ。

これじゃ、疲弊するよな…。

悪魔召喚アプリがインストールされているスマホは、アプリ自体が魔術的プログラムで組まれているらしく、異界でも動く。

だが、只の機械では悪魔を認識する事が出来ないため、アナライズなどは不可能である。

このままじゃあ、詰むよな…。

てな事をカオスやドドルの爺さん達に愚痴ったら、

「ん？小僧、何じゃそんなことを悩んどったのか。解決法ならあるぞい。」

つと、軽く返された。

「んな!?あるの、凄え！」

興奮して尋ねる俺に、にやり、と笑う、爺さんs。

「簡単じゃ。そのスマホは、多機能を目指しているがゆえに、サマナーには逆に不十分なんじゃよ。だからこそ、それに特化した物を作れば良いんじゃ。人体レベルの式神を動かすにはまだ不十分じゃが、単純な物には十分なM A Gバッテリーは完成しておるからの。」

あ、そうか。

ヘルメットのバイザーで悪魔見えるようにしてたじゃん！

認識出来れば、解析できる。

解析した物を、集積していけば、正確性も上がる…！
「ただのう。」

と、珍しく困ったようにカオスの爺さんが続けた。

「ワシらは、プログラミングは門外漢じゃ。出来なくはないと思うが、いつになるか分からんのう。」

まあ、これは仕方がない。

カオスの爺さんはコンピューターが無い時代から生きている上、学習しようとするれば傍から以前の事を忘れる。

ドドルの爺さんは、職人畑ひらめき系であって、基礎系理論系ではない。

理論系の天才なんて、そんな…。

「あ。」

この間、知り合ったな！

ラムと、川縁の道を歩いている。

この時間だと、彼らは人目を避けて橋の下で特訓をしているはずだ。

何しろ、仲魔に指示を出しているのは、何もない空間に向けて話している危ない人だからな、未覚醒者には。

「今だ、ガツシユ！」

「分かったのだ、ザケル！」

おくやつとるやつとる。

「おくい、清磨、ガツシユ。」

「ひさしぶりだっちゃね！」

「あ、的さん、ラムさん。」

「おく、久しぶりだの、的、ラム！」

こつちを見て、ぺこりとする清磨と、ぶんぶんと手を振ってくる、ガツシユ。

彼らは、この間知り合った、中々にユニークな存在だ。

何でも、悪魔のガツシユは記憶喪失であるが、イギリスで清磨の父に救われて、天才であるが故の孤独で引きこもりがちな清磨を鍛えるために日本に来て、自身の出身魔界の「魔王を決める」戦いに強制参加させられていたところに行くわしたんだよね（的君の中身、金色の

ガツシユ!!掲載時点で既にブラック勤務してたので、サンデー読んでません)。

まあ、あんまりにも相手が酷かったんで軽く手を貸したんだが、その際にラムが同じ雷撃系のスキル使いという事で懐かれたんだよな。「どうしたんですか、何か重大な事件でも?」

真面目な顔をして聞いてくる、清麿。

「おう、ラム、強くなった私を見てくれ!」

「分かったっちゃよ、かかってくるっちゃ!」

ふんす、と胸を張るガツシユと、ふんわりと笑って受け止める、ラム。

ああ、なんか癒しじゃあ〜。

なんか、久しぶりのまったりした空気にはっこりしたが、気を引き締めて、清麿に告げる。

「ああ、実は、一寸手伝ってほしいことがあるんだが…。」

「ああ、ここの所不要ですね。」

アンサートーカー

「なんと!」

「ふむ。興味深い…。」

「あれ、ここ、別の召喚を挟んでますよね…?」

アンサートーカー

「これは…!巧妙に天使召喚につなげているのか!」

「ぐぬ!、だが上手い!」

「仕上げるに、ここを、こうして。」

アンサートーカー!」

「なるほど、これは一本食らったわい!」

「ふはは、この年になって、まだ学ぶことがあるとは!」

「あは、あははははははは!」

「くは、くははははははは!」

「ふは、ふははははははは!」

「ははは、はははははははははは!!!!!!」

「の、のう、的、私は全く話が理解できないのだが!？」

「あ、安心しろ、俺にも全く分からん…。」

「だ、ダーリン怖いっちゃ…。」

サバトよりもサバトの空気を醸し出して哄笑しあう三人に、俺たちは。部屋の隅でガタガタと震えながら身を寄せ合っていたのであった。

紆余曲折はあったが、サマナー用デバイスは完成した。

まず、基本は、ハンズフリー。

当たり前である。

戦ってるときに、片手が塞がるのは、致命的だ。

次に、安全性。

原作の、手の甲側にインターフェイスって、脆すぎないか？

いや、いざとなった時、自分をかばったら、咄嗟に血管避けて甲側を向けるよな。

と、言う事で、指先まで覆うガントレット型になった。

インターフェイスは掌側に、細長い8インチの画面で、基本タッチセンサーだが、スライド式キーボードもついている。

悪魔を認識するためのカメラは、手首側についている

指先まで覆う形なのは、アクションキーを導入しているからだ。

中指で掌にあるスイッチに触れながらハンドサインすることで、アプリが起動する。

今入っているのは、悪魔召喚（清磨改ver.）、悪魔保管（なんと、死亡時にこの中で再召喚可能となった）、デビルアナライズ、エナミ―サーチである。

あ、ネットにも繋がるぞ。

重量は5kgを超えてしまったが、覚醒者には問題ない重さで、とはいっても今までとバランスが違うので、調整とテストを兼ねて異界で使用しているが、みんなからも好評である。

第18話：地中海に全員集合！

デビルアナライズ、活躍している。

悪魔の弱点を的確に突くことで、戦闘時間の短縮にもなり、所員さんたちの消耗も抑えることに繋がっている。

デバイスの名称は、「Communicator of Mysterious Parallel existence」、通称COMPとした（あたりまえだよなあ）。

清麿達にも渡してあり、ガツシユの魔界の王勝ち抜き戦も順調との事。

清麿、今まで自分レベルの話ができる人間居なかったせいで、ウチの異界に入りびたりだからなあ。

その間ガツシユは、俺の仲魔達に稽古をつけてもらっているようだ。

因みにウチが異界を持っていることは、業界的にはもう確定事項になっている。

何しろ、異界産の鉱石をスリーダイヤモンドさんに卸しているんだから、そりゃ分かるわな。

だもんで、こういう輩が沸いてくる。

「貴様の息子を我が家の婿にしてやろう。どうだ、嬉しかろうが！」
「お帰りください。」

いや、ほんと、下等な家が名家に連なれるんだから、無条件に承諾するんって考える人間が多い事。

断られるとは微塵も考えていないんで、激怒して帰る際に呪いを仕掛けてマカラカーンされるまでがセットだ。

その他にも、

「そのような異界を独占するのはけしからん！隣国との共同資源として管理すべきだ。」

なんて事を言ってきた政治家（注1）もいた。

「寝言は寝てから言ってください。」

って親父が追い出していたが、あんた、何処の国の政治家だよ…。

そんな状態なので、ウチの事務所の周りは忍び込もうとする作業員や、所員をスカウトしようとする他の組織員や、浚って教化洗脳しようとするメシアンやらで、おちおち一人歩いていられない状態となっており、結果所員の異界への引きこもり率が上がってしまったている。

まあ、カオス爺さん謹製の結界を乗り越えた奴はまだいないが、乗り越えて異界に入っても誰も戻れないだろうな。

Lv20越えのボスがダース単位に、種々属性のLv10越えの悪魔がぞろぞろいる異界、踏破できるのってライドウ位じゃないか（注2）？

「ふむ、矢張りCOMPの配備は困難でありますか。」

応接室のソファでピシリと背筋を伸ばして座る五島三佐が、心底残念そうに零した。

「ええ、如何せんCOMPは希少な魔鉱石を使用している関係で大量生産は難しいんですの。」

おユキさんも、（儲け話が出来なくて）残念そうに返す。

ん、商談に親父はどうしたかって？

これはお前が始めた案件だから任す、って異界で修行三昧してますが、なにか（遠い目）？

なにせ、家も異界内に引越したからなあ、セキュリティの関係で。

零やお袋、拉致られかけたもんで、流石にな。

お蔭で零、悪魔憑デビルシフターきに覚醒しちゃったよ。

まだ変身までは出来ないみたいだけど、親父が張り切っちゃって。

閑話休題。

ヘルメットの方は、徐々に配備が進んできている。

五島三佐の部隊も以前より負担が減ってきており、隊員の除隊率も改善してきたとか。

そうになると、人間欲が出てくるもので、MAC所員が除霊で使い始めたCOMPに注目するのは当然の流れである。

しかし、COMPが現状大量生産できないのは本当だ。

真面目に霊障被害が拡大してウチも忙しくなってきたので、自衛隊には協力したいところではあるのだが…。

無い袖は、振れんもんなあ。

コンコン。

「おユキさん、的さん、来客中に申し訳ありませんが、ドクターカオスが、用件があるというらっしゃってます。」

松木さんがノックをした直後、返答する前に扉が開く。

「小僧、邪魔をするぞ！」

「おいおい、カオス爺さん、今来客中なんだが？」

傍若無人に応接室に足を踏み入れてきたカオスに苦言を呈する。

「なに、そう邪険にするものではない。自衛隊にも利のある話じゃぞ？」

にやり、と悪役そのものの笑顔を浮かべる、カオスであった。

カオスの提案は、伊達にヨーロッパの魔王と称されてはいなかったんだと、感心させられた。

現在、自衛隊では悪魔召喚アプリは使用していない。

出所不明なものは、公的機関で採用できるはずも無いのだ。

そこで、ヤタガラスに伝わる封魔管を自衛隊に納入させ（材料はウチの異界で賄えるらしい）、ウチの異界の悪魔を仲介して契約させる、言わば限定的なデビルオークションを行うのだ。

これには五島三佐も流石だ、と深く納得していた。

自衛隊側は、危険性を極力抑えながら戦力増強になるし、ヤタガラス側にも利益と権益の強化になる。

ウチは材料費と仲介料に、ヤタガラスとの繋がり強化。

デビルオークションに食い込もうとする勢力はヤタガラスが抑えてくれるだろうしな。

後にこのデビオク、警察庁や国家公安委員会、ヤタガラスの機械音痴にも利用されるようになり、官給品の項目に悪魔が追加されることになるのであった。

…え、唐巢神父から電話？

はい、はい…神父、一神教って悪魔召喚禁じられて無いっすか（ただし天使は除く）？

どうしても、力なき人を救うために必要？

…ウチの名前、絶対に出さないで下さいよ？

磯^{日本の吸血鬼}女の伝手と、一神教圏の伝承と、生涯不犯の教義が合わさったのか、何故か顕現したダンピールトと契約した神父は、目的は果たしたのだが、あっさり教会から破門されたのであった。

…ウチの伝手で、土地安く貸しますよ？

個人教会作ります？

第19話：海賊と呼ばれた男

異界の鉱山から、鉱石以外に算出するものがある。

魔石である。

ゲームでは、回復アイテムであるのだが、爺sは別の可能性を見出した。

エネルギー源である。

MAGが凝縮して形成された魔石であるなら、取り出せるのではないか？

そうして出来たのがMAGバッテリーだ。

今はまだエネルギー変換効率が悪いので、マリアさん達アンドロイドをまともに動かそうとすると同じ体積位のバッテリーが必要なため、今も研究が進められている。

何が言いたいのかと言うと、終末後のエネルギー問題が解決する道筋が見えていたんで、手を付けていなかったことがあるんだ。

石油。

いや、服にしてもランちゃんの権能から生まれた蚕から取れる絹糸、軽くて肌触りも良く通気性に優れているのに、拳銃の弾も通さない上に、ムド防御効果が乗ってるんで、下手な石油製品はいらんし、終末後は車、飛行機、船舶が移動手段として有効なのか疑問だったのもあって、重要視していなかったんだよなあ。

それに、ウチの異界、面堂鍛冶神がボスなだけあって、火の要素が強くて相性悪いのもある。

今でもジャックランタンの悪戯でボヤ騒ぎが起きとるのに、正に火に油を注ぐのは勘弁だぜ。

って、思ってたんだが。

MACの応接室に、申し訳なさそうな顔の五島三佐と、高級そうなスーツを着たオッサンが居る。

貰った名刺には、通商産業大臣と肩書が記されている。

「いきなり訪問をしたことをまずはお詫びする。しかし、事は急を要する為、五島三佐に無理を言って連れてきてもらったのだ。」

大臣は、一寸頭を下げて見せ、続けた。

「君は、メシア教と言うのを知っているかね？」

「…ええ、良く知ってます。ウチにもちよつかい掛けてきてますし。」
ほんと、ゴキブリみたいに湧いてくるの、止めてもらえませんかね！

「そうか、ならば話は早い。かのカルト集団が、サウジアラビアの油田地帯に大怨霊を召喚して付近に人間が立ち入れないようになっていく。」

は？

「二神教も、カルトとはいえ自分のところの一派がやらかした事でエクソシストの派遣を打診しているようだが、知ってる通り地元宗教とは犬猿の仲。メンツやら権利やらでなかなか話が進んでおらんよ。」

ちよ、一寸待って。

確か。

「え、とすみません、確か石油採掘施設って一回止めちゃうと…。」

「うむ、再開にどれほど時間が掛かるか分からない上、現状の産油量が維持できるかも不明だ。」

うわ、オイルショック再び、かよ！

「現在日本の石油備蓄量は約8か月。余裕があるように見えるが、先行きが不透明な中、心許ない。それを踏まえて、お尋ねする。君たちが開発しているエネルギー源は、どれ位有望だね？」

思わず握りしめた手が、汗ばむ。

流石、腐っても政府、どこから嗅ぎつけたのやら。

「…正直に申します。現状では、小さな村レベルが維持できるかどうか、だと思えます。研究が進めば分かりませんが。」

「ふむ。それについては我々も協力できることが多いと思う。検討して欲しい。」

俺の答えにさほど落胆した様子を見せず、今後に楔を打ち込んでくる大臣。

上手いな。

でも、これは本命じゃなさそうだ。

「さて、諸星君。」

ほら来た。

「五島三佐から、君が極めて優秀な悪魔召喚者だと聞いている。石油に関する神様を召喚することは、可能だろうか？」

新潟県西蒲原郡弥彦村。

いま、ここにある神社は、緊迫した空気に包まれている。

爆破予告があり、実際に不審物が境内で見つかったのだ。

神社は規制線が引かれ、封鎖されていた。

そこに、対爆スーツを着て、耐爆容器を持った県警機動隊の爆弾処理班が到着し、境内に入っていった。

ふう、暑苦しいたらありやしないな！

今回は、政府案件という事で、見届け人としての五島三佐と一緒に変装して現場に来ている。

ああ、ラムも一緒にいるけど見えないからいつもの格好だ。

「ねえ、ダーリン。石油の神様って日本にいたっちゃね。」

ん、と伸びをした後聞いてくるラム。

まあ、資源が無い無い言ってるからあんまり知られてないけど、実は古代から日本でも石油が産出している。

ここ新潟でも産出しており、この神社の主神、伊夜比古大神が産業の神様だったことより、石油の神としても祭られるようになったようだ。

現在は枯れたようだが。

境内に置かれた不審物に近づき、蓋を開ける。

とたん香る、独特の臭気。

そう、不審物の中身は石油である。

そして、五島三佐と運び込んだ耐爆容器を開ける。

中にあるのは、一抱え程の黒曜石、を模した、MAGバッテリーである。

「これ、どうするっちゃ、ダーリン？」

「ん？、ああ、これを依り代にしてもらおうってね。」

ズボ、と手袋を外してCOMPを立ち上げる。

通常の召喚では、召喚者と契約してMAGのやり取りを行う。

だが、今回それをするのはヤバイ。

契約者に、とてつもない利権が集中するのと、その人格によっては日本に不利益をもたらす可能性だってある。

そこで、特製の依り代を準備して、国家として管理してもらおうというわけだ。

「そんじゃ、一丁やってみましようかね！」

”SUMMON DEVIL”

五島は、驚愕していた。

確かに自分は歴史ある霊能の家に生まれてはいない。

しかしながら、入隊この方散々怪異と向き合ってきた中で、いろんな霊能者と遭ってきた。

中には悪魔召喚者もいたが、こんな気軽に召喚をするものは、居ない、いや出来るわけがない。

最近が悪魔召喚アプリがあるが、あれにしたって何が出てくるかわからず、また素直に従ってくれるかもわからない、まさしく伸るか反るかのかギャンブルである。

それを。

目的の悪魔を易々と引き当てて見せたばかりか、あつさりと依り代に降ろして見せた。

更に彼は、並みの霊能者であれば顕現させるだけでMAGを吸い尽くされ、一瞬で干からびかねない大妖を、東京からここまで顕現させ続けてケロツとしている。

護国の為に、彼との縁を切ってはならない。

決意を新たにする五島の前で、当の本人はへら、つと笑って手を振った。

「五島三佐、終わりましたよ。撤収しましょう！」

数日後、日本中をあるニュースが駆け巡った。

新潟県の国有林から新たな油田が発見され、調査の結果から国内需要の数が賄える可能性があるとの情報に、報道機関は連日特集を組

んだ。

高が数%と見做すなかれ、有事を考えると純国産が確保されることは産業にも国防にも重要なのだ。

隣の国が「我が国の固有の資源である」と声明を出したが、またか、と相手にもされず、試掘塔が建てられる予定地に早速伊夜比古の神の小さな分社が建立された。

現在関係者以外立ち入り禁止との事で、逆にプレミア感が高まり、国民の注目度も高い。

「まあ、今は鹿児島に安置されてるんだけどね、ご神体。」

異界のリビングでラムらと寛ぎながらテレビの報道を見て眩く。

あ、テレビ、カオス爺さん謹製の異界でも動く奴だし、電波は異界の入り口から力業で線を引っ張ってきている。

「あん？、なんでんなどに安置してんだ、諸星の旦那。」

バリ、と異界産の米で作った煎餅をかじりながら聞いてくる、弁天様。

「あそこの石油備蓄基地から、石油を運び出してその減少分を穴埋めするんだよ。日本の石油会社やガソリンスタンドの神棚に伊夜比古のお札を配ってるから、そこからの祈りでMAGが集められて実際には日本の需要を満たすくらいは産出出来そうだけど、んなことすりや世界から袋叩き似合うってんで足りない分だけを石油会社に融通するんだってよ。」

「はん、面倒くせえことすんだな。」

ふん、と鼻で笑うと、興味が無くなっただのかまた煎餅にかぶりつく、弁天様。

まあ、ウチにも管理者として毎月料金が支払われてる。

いずれダミーの半官半民の石油会社が設立される予定で、ウチも一枚噛ませてもらう予定だ。

おユキさんがまた艶々としてたよ。

第20話：ESPERS LEGEND

MAGバッテリーについては、国との共同研究と言う形に落ち着いた。

エネルギー事業は、国家の根幹に関わるので、まあ仕方がない。新たに、MACから独立事業として会社を立ち上げることにした。形態としては、第3セクターであるが、実態はがつつり国の政策に食い込んでいる。

だもんで、公安から他国からの干渉除け兼、こちらの監視要員が送り込まれることになった。

窮屈にはなるけど、安全も担保されるんだ、しゃあないか。

新しいエネルギーとなると、既存勢力からの妨害や、情報を抜いて先に発表して権利を宣言しようとする国なんかもいるからなあ。

「ダーリン、ぶちぶち言っていないで早く行くっちゃよ、人を待たせてるんだから。」

リビングでぶつくさ言っていた俺を、ラムが促す。

「わあ〜ってるよ。…はあ、行くか。」

なんで男何かの為に出向かにやならんのよ、と、内心で溢し乍ら、ブル崩壊で安く手に入れた下町の工場へ出向く。

木の葉を隠すなら、森の中って言うだろ？

周り、町工場だらけで、何かやっても目立たないんだわ。

表向きはスマホのバッテリー部品の下請け工場としていて、それらしい材料なんかが納入されても疑われにくくしている。

さらに、認識疎外の結界が掛けられていて、そうと認識していないと通り過ぎてしまうようになってる。

中に無断で侵入したら？

番犬ならぬ番悪魔の出番です。

因みに登記上の代表はお袋。

未成年に代表なんて出来るわけないだろ。

工場に入ると、事務所で待っていた、童顔イケメン（けっ）の男が、奇麗な敬礼をして見せた。

「警察庁公安部の、神名代 純です。よろしくお願いします。」
ん？

神名代 純？

どこかで…。

え

いやまさか？

「あ、あの、神名代さん、教師なお義姉さん、おられませんか？」

「!?、なんでそれを!!、あ、いや、僕が読めない諸星さんなら、当然か
もしれませんね…。確かに、ジャステイ就職免許を持った義姉がいます。」

アイエエエ!?!、なんで、ジャステイ正義い、ジャステイ正義い、なんで!!?

この世界、霊力を超能力と言う形で発現するものが居る。

除霊に使えなくも無いのだが、どちらかと言うと対人が得意分野と
なる。

テレパシー、クレアボヤンス、トラポートなど、実にスパイ向きの
能力が多い。

そのカウンターとして公安にも超能力者が配備されているとは噂
で聞いていたけど、まさか、ジャステイ彼とはね。

世界観、バグってない？

まあ、神名代さん、世界最高クラスの超能力者だそうで、大陸系の
浸透は心配なさそうだな。

なにしろあっち、賄賂、ハニトラは当たり前で、戸籍どころか記憶
まで捏造して潜り込んでくるらしい。

怖!

新しく雇った人たちは、当然神名代さんが裏を取っており、問題な
い。

新規エネルギー事業に関わるという事で、ガチガチの守秘義務を結
んでいるが、それでも情熱が上回る人を選んだ、との事。

いや、この人いたら人事完璧じゃね？

カオス爺さん達は、トラポートでここには出入りすることになって
いる。

魔石は、日本の山から見つかった鉱石で、放射線などは含まない新

種のエネルギー結晶として発表する予定だ。

勿論退魔筋ではすぐに分かると思うが、量がある程度揃えることは、異界に鉱山持つてるウチ以外出来んと思うぞ。

それまでにダミーの鉱山も用意する事になっている。

採掘量の関係として、スマホのような小型家電のリチウムイオン電池に代わるものとして流通させる。

充電器もついているが、実際は電気ではなく周囲のMAGを効果的に集めて充填させる装置だ。

これで、日本全体の電気使用量の削減を図るのと、MAG濃度を出るだけ減らしてGP上昇をなるべく抑えることも目指している。

塵も積もれば、で、かなり効果があるはずだ。

何故に日本政府がここまで力を入れているかと言うと、この間の中東でのメシアン共のテロの影響だ。

紆余曲折を経て、一神教が何とか抑え込んだのだが、初動が遅れに遅れたため被害が大きく現地が混乱し、反政府勢力の活動も活発化したため採掘の再開の目途がまだ立っていない。

更に、一神教のエクソシストにも甚大な被害が出たため、欧州の霊障被害も増加し、その隙間をメシア教が埋める形で勢力を伸長させたため、各地で混乱が生じている。

リチウムの主要産出国はオーストラリアである為、今のところ影響は少ないが、オーストラリアにもメシア教は浸透してきているため、エネルギー関係はなるべく内製化しておきたいというのが本音である。

いや、それでオカルトに頼るん？って思わなくも無いが、オカルトが実際にある世界ではこうなるのかなあ、と、隣でニコニコしながら浮かんでいるラムを眺めるのであった。

あれが、警護対象であり、監視対象か。

恐ろしいものだな。

神名代は、的たちが去ったあと、知らず入っていた体の力を緩めると、ふう、と嘆息した。

対象によつては、読みにくいことはあっても、今回のように全く読

めないことは初めてであった。

その横にいた、美しい少女も、全く読めない、いや、読むことを躊躇させる異質さがあった。

あれが、悪魔と言う存在なのか。

正直、仕事で無ければ、同じ空間にいることが苦痛なほど、在り様が違い過ぎる。

それを、気軽に横に侍らせる、規格外。

これからの仕事を思うと、胃の辺りが重くなる神名代であった。

第21話：変わりゆく世界

世界情勢は、さらに混とんとしてきている。

ソビエト連邦は元々内部崩壊が進んでいたところに石油の減産が追い打ちをかけた。

え、ロシア資源あるじゃん、と思われるかもしれないが、あれは2010年頃から開発されたのであって、この頃はバリバリの輸入国である。

そして、改革の失敗で当時の国民は非常に貧しかった。

結果として分断が進み、民族主義者やらメシアンやらがさらにそれを煽り、前世のような議会解散ではなく、内戦一歩手前状態になっている。

欧州は、こちらは国内での暴動が多発している。

なにしろメシア教にとってはホームグラウンド。

もともと終末論は一神教の教義でもあったので、一寸煽ってやると着火しやすいのだ。

アフリカ大陸は、まだ国体は保っているものの、実質内戦に突入している国が大多数だ。

ヨーロッパの軛が外れると、吹き出す民族問題に利権争い、そこに、メシアン。

情熱大陸一歩手前である。

お隣は、この時期から世界の工場として急成長を遂げるはずだったのだが、輸出先が混乱状態では成長できるか分からず、投資が取り返せるか不明となってきたおり国内に影を落としている。

好材料は、容赦のない宗教弾圧でメシア教の伸長が鈍い事か。

じゃあ、日本はと言えばバブル直後でこちらも国内が安定しているとは言い難い。

日本的宗教観からメシア教はうさん臭くみられているが、不景気と終末への恐怖から、じわじわ都市部で暗躍している。

米国は緩やかな景気上昇をみせているが、メシアンの浸透であちらこちらで事件が起きており前世のような世界の警察は出来そうもな

い。

気が付いたら田舎町がメシア教に乗っ取られていた、なんてことも起きている。

南米は通貨危機から立ち直っておらず、ゲリラ組織と麻薬組織とメシアンが荒らしまわっている状況だ。

お蔭で終末論がますます盛んになって、メシア教の勢力が増えて、G Pが上昇する、の悪循環が加速している。

うん、詰んでるな。

俺一人でこれ止めるって、無理だろ。

せめて日本国内だけでもソフトに終末化したいもんだ。

その国内の霊障事案も、極めて悪化してきている。

零細な退魔組織は軒並みご臨終で、五島三佐の部隊もフル稼働状態だ。

俺にしても、立派な戦力として地方を仲魔達と廻っている。

異界のボスのLvが20と言うものもちらほらと散見される中、退魔側のレベルは1桁が精々なのだ。

そりゃ、耐えきれないよな。

今日も今日とて、地方の異界に潜ってる。

最初、来訪した少年を見て、ヤタガラスに見捨てられたか、と絶望した。

たった一人で寄越すとは、こちらの情報を理解していないのか、と激怒もした。

だが、今日の前では。

「よし、ラムー！」

「分かってるつちや、マハジオダイーン！」

押し寄せる怨霊の大群に稲妻の雨を降らせて蹴散らす、鬼女。

「おユキさん！」

「お任せを。マハブフダイーン。」

土蜘蛛の群れは、雪女が凍り付かせる。

「クラマ様、あいつ、リカーム持ちだ！」

「任せい、ザンダイン。」

倒れた悪魔に復活呪文をかけようとした骸骨兵を、的確に切り裂く天狗。

絶望しか感じなかった悪魔の群れを、文字通り殲滅していく、大妖を率いる少年。

理解が追い付かない。

何故、そのような大妖を複数体引き連れて、平然とした顔で居れるのか。

何故、そのように的確に悪魔の弱点をつけるのか。

そして、指揮能力が高いだけかと思えば、押し寄せてきたガキの群れを、ワイン樽程もある金属製の大槌で、軽々と吹き飛ばしている。

理解が出来ようはず無い！

戦慄きながら見つめる私の前で、悪魔の大群は、消滅した。

疲れた様子も見せずに、左前腕に装着された装置を見る、少年。

「ん、エネミーサーチによると、あつちにでかい反応があるな。ボスだな。」

「ちよつと確認するっちゃね。」

言うのと、天高く舞い上がる、鬼女。

「ダーリン、あつちのほうに何かおっきな髑髏が浮いてるっちゃよ。」

「髑髏…あれかな。もう少し近づいて確認するぞ。」

躊躇することなく足を踏み出す少年。

慌てて私も後を追いかける。

近づくとつれ、私でも分かる、どす黒い瘴気。

汚泥のように体に纏わりつき、息をするのさえ、困難になっていく。

喘ぎながらやつの思いで歩を進める私の前で、まるで散歩をする

ような気軽な感じで歩を進める、少年。

退魔の家の棟梁としての意地で着いていく私であったが、遠くに見えた怨霊に、思わず膝をついてしまった。

家一軒はあるような大きさの、恨みが凝縮したような黒い髑髏。

眼窩には、瘴気を吐き出す蛇が、絡みついている。

駄目だ。

！
あれは、あれはここら一带、いや日本を壊滅させうる、大怨霊だ…

ガチガチと歯の根を鳴らす私の横で、少年が目を凝らす。

「思った通り、ロアか。Lv25…中々に高いな。ま、何とかなるか。」
と、雪女と天狗を送還し、新たに3体の悪魔を召喚した。

馬鹿な…！

3体召喚でも信じられないのに、4体同時召喚だ!?

あれは、弁財天の分け身か？、それに、詳しくは分からぬが、天津神の気配のする地母神と、まさか地蔵尊!?

「じゃあ、ランちゃん、弁天様、錯乱坊、頼むぜ。」

混乱する私の前で少年は悪魔たちに指示を飛ばす。

「はあい、任せてね、ダーリン。」

まず動いたのは、ゆるふわな衣装の地母神。

「マカカジャ。」

途端、少年たちの霊圧が上がる。

それに気づいてこちらに寄って来る大怨霊に、弁財天の分け身がつまらなそうに進みだす。

「つたく、暴れられないんじゃ気合が乗らねえんだけどよ。」

すう、と息を吸い込むと、

「おら、なめんじゃねえぞ、こら!!」

と、力のある言葉を浴びせかけられ、大怨霊が身を竦める！

その隙を見逃さず、地蔵尊が真言を繰り返す！

「活あ~~~~~~~~つ!!」

消えた。

あの、死の、穢れの象徴のような大怨霊が、残滓も残さず。

ああ、我が家は、いや、日本は救われたのだ…。

知らず、私の眼からは涙が溢れていたのであった。

いやあ、今回は美味しかったな！

なんせそこその経験値寄越してくれる上に、こっちの仲間にとつて弱点だらけだったもんな。

Lvも上がって結構アイテムも拾えたし、大満足だ。

あと、最初偉そうにしてたオツサンが、異界破壊後にもつ淒く腰を低くして食事を勧めて来たけど、おユキさんが「残念ですけど、この後も予定が入っておりますので」、とニツコリと断ったところ顔を青くして撤回してたけど、実際色々予定詰まってるからな…。

まあ、いつでも来れるんだし、名物は今度ゆつくりと食べに来よう。

第22話：ボーイ ミーツ ガール

高校2年生となった。

サウジの油田が漸く再開となり、これで安心だ。つてなれば世の中楽だったんだが。

まず、中東各国での反政府組織の活動が収まっていない。

採掘しても、安全に港へ運ぶことが難しくなっている。

万事上手くいき、港から運び出せたとしても、紅海側はアフリカの混乱から海賊が跋扈しており、それを抑える余裕が国連に無い。

じゃあ、ペルシア湾から、て、なると、ここはまたイランとイラク間で緊張が高く、船舶の安全航行が保証されない状況だ。

現状、周囲の状況を見ながら船団などを組み、恐る恐る輸送している。

結果、今でも石油は足りていない。

足りないことで政情不安を呼び、小国間では石油の奪い合いが起きている。

因みにソビエトは、内戦までは起きなかったが、前世以上に細分化されてロシア連邦が成立しており、今でも週替わりで国境線が変更されているぞ。

また、一旦上がったG Pは色んな影響をもたらしていた。

野良悪魔の出現、一般人の覚醒。

勿論覚醒する人間はごくわずかであったが、認識できる人が野良悪魔を実際に映像として捉えてしまい、ネットの海に拡散したんだ。

各国政府は、偽造だと表明していたが、事実として世界中で何物かに喰われたのが原因の不審死が増加しており、本物であると信じる人が増えてきている。

日本国内では、不安はありつつも重大な政情不安は起きていない。

石油を安定的に供給出来ていることが評価されている。

また、M A G バッテリーの発表も好意的にとらえられている。

お蔭で、ダミー鉱山に建立された金山彦を祭る神社への感謝の念から面堂へのM A Gの還流も膨大となり、仲魔達のL vも上がったこと

で、新しい鉱石が得られるようになっていて、属性石である。

それぞれボスクラスの仲魔達が異界で暮らすことによつて性質が異界になじんで行き、結晶化したものだ。

炎性石、雷性石、氷性石、風性石、闇性石、光性石。

残念ながら万能石は見つかっていない。

これを用いて爺さんs、属性弾を作り出すことに成功したんだぜ。

五島三佐の部隊と試験したところ、相手に与えるダメージは射手の覚醒レベルによることが分かった。

未覚醒者がヘルメットで相手を認識して撃つた場合、Lv1〜2程度を駆逐できる可能性があり、覚醒者は同Lv帯は駆逐可、Lv差が5程度であればダメージを与えることが出来、10も離れると怯ませることが出来る位になる。

因みにコストは馬鹿高い。

鉛には混ぜることが出来ず、鉛の芯を銀に混ぜた魔精石でコーティングしてるからな。

この属性弾による除霊の結果、自衛隊内に覚醒者が増えている。

才能はお察しだが、低Lv帯なら対応できる部隊が中隊レベルまで拡充されたのだ。

また、MAGバッテリーの研究応用から、MAGを吸収することで悪魔の動きを阻害するネットも生み出されている。

低級な霊団に投網のように被せて行動を阻害するのだが、中々に活躍しているらしい。

え、ラムたちに使うとどうなるって？

容量を一瞬で越えて破れるよ？

実は、ヘルメットについては米軍にも卸し始めている。

なんせ、銃絶対主義のお国ゆえ、悪魔が認識できるヘルメットについては需要がでかい。

今のところ国内優先なので、向こうからは矢のような催促であるが、材料の関係で現在のペース以上の生産は無理だ。

一応こういう材料があれば出来るよ、と素材について米国に秘密裏

に伝えてあるが、中々条件の合致する異界は見つかっていないようだ。

一部裏に流れてメシアンやギャングなんかが入手したようだが、前述の材料の関係で量産は出来ないだろうし、ある程度この事態は予想していたので仕方ないと割り切った。

ただ、悪魔を認識できる人間が増えるという事は、それだけ世間にも広まるという事で、日本と米国では悪魔の存在が現実視されつつあり、それがまたメシア教の勢力強化に繋がって居ると言う。

ああ、もう、何か、やってもやっても問題が起きる！

異界のリビングで頭を掻き巻る。

確かに日本はある程度落ち着いてるけど、メガテンの災害を思えば、足りてないよなあ。

ふう、と溜息をつけてソファに背中を預けると、ラムがキッチンから出てきた。

「まあまあダーリン、悩みすぎるのもいけないっちゃよ。」

そう言いながら、お盆にのせた皿の上にある、コーンに入ったシャーベットを渡してくる。

これは、最近出現したおユキさん系統のフード悪魔で、鳥型をしているが、嘴を挽ぐとコーンに入ったシャーベットになるのだ。

その名もまんま、シャーベット。

氷結耐性が付くので、自衛隊への隠れた人気商品である。味も抜群だぞ。

しばし、脳休憩タイム。

「ねえ、ダーリン、他の国って都会で悪魔被害が多いっちゃよね？日本、あんまり都会での被害聞かないのは、なんでだっちゃ？」

ペロペロとシャーベットを舐めながら聞いてくる、ラム。

「あく、うん、MAGバッテリー、周囲のMAGを集積するの話したよな？」

「うん、それで電気の消費を抑えて、石油消費も抑えようって話だったっちゃね？」

それは聞いた、と言う顔で続きを促す、ラム。

「ああ、一つ一つのバッテリーが集積するMAGはそれ程でも無いが、都会は人口が多い。そして、政府の主導で小型家電のバッテリーは、MAGバッテリーに切り替わってきているから・・・。」

「…、集積されるMAG量も多くなって、MAG濃度が下がる、ってわけっちゃね!」

そう、本来人の感情の揺らぎから生じるMAGは、都会でこそ多量に発生するのであるが。

MAGバッテリーのお蔭で、発生するそばから集積・消費され、逆説的に人気のない田舎の山奥に集積点が発生することになり、熊による被害と誤魔化す事が出来ている。

「でもなあ、いくら日本が頑張っても、今のスピードでGP上昇したら、焼け石に水なんだよな…。」

ぐてり、とソファにへたり込む。

勘弁してくれよ、前世で50年以上の経験があるからって、世界の規模のトラブルなんて見たことも聞いたこともないんだって!

「ダーリン!大丈夫け?」

ゆさゆさ、と揺さぶられるのに、ふ、と顔を上げると、ラムのドアツプ。

奇麗だな。

それに、いい匂い。

視線の中で、揺れる、ラムの眼差し。

間近で感じる、吐息。

少しづつ、近づいて。

「小僧!、閃いたぞ!!」

ドバン、とリビングの扉を開けて入ってくる、カオス。

「…何をしとるんじや、お主ら?」

天井に張り付いているラムと、腕立て伏せをしている俺らを、きよとんとした顔で聞いてくる、カオスであった。

「うっさいくくくく!!!」

閑話

深夜、M A Cの事務所内に蠢く、3人の影。

暗視ゴーグルを着け、全身黒づくめの男たちは、滑るような身のこなしで足音も立てずに所長室を目指す。

それにしても、とリーダーは思う。

えらく警戒の厳しい場所だ、と。

この建物に入るために、周囲を警戒していた人員を釣り出す陽動部隊を5部隊も用意しなければならなかった上に、侵入したら侵入したでどこの軍事施設だと言わんばかりの警報や罠の山。

S A Sで腕利きで鳴らした自分たちで無ければ、もう既に露見していたであろう。

だが。

ここまで嚴重にしている異界であれば。

次の世界の礎として神に捧げるに相応しいはず…！

内心の高揚を押し殺し、所長室の扉の蝶番部分に油を差し、音を立てないように開くと3人は身を低くして室内に滑り込み、周囲をすばやくチェック、人影が居ないこと確認して立ち上がる。

注目するは、壁沿いにある書架。

百戦錬磨の彼らの眼は、そこにある違和感を見逃さない。

書架の横の絨毯を捲ると、そこにはレールが露見した。

にやり、と覆面の下で笑うと、リーダーはハンドサインで指示を出す。

L 8 5を構えるリーダーの前で書架を動かす部下達。

と、移動した後に現れる、黒い孔。

すると、リーダーの後ろに現れる、翼を持った騎士姿の天使^{悪魔}。

「よくやりましたね。神もそなたの献身をお喜びになるでしょう。」

「おお、大天使様^{アークエンジェル}」

ぎ、と膝まづく、黒づくめ達。

リーダーは、メシア教の中でもその素養（L v 8）を神により祝福^{アークエンジェル}され、大天使と言う強力な神の剣が降臨したのだ。

るよ、魅^{マリンカリン}了掛けてね。

共産圏は、場合によりけり。

居なくなつた方が都合が良い場合もあるんだってさ。

まあ、引き渡すたびに後藤さんが良い顔をする事。

お隣寄り、つて、されてた政治家さんが最近引退が多いのは、なん
でなんだろうね？

第23話：彼女がスーツに着替えたら

カオス爺さん、やっぱ天才だわ。

爺さんs、マリアさん達みたいなアンドロイドを量産することを考えていたが、ネックなのはやはり素材と価格。

現在の異界で集められなくもないのだが、非常に手間がかかり、商業ベースに乗せようとする、半年でようやく一体が完成し、値段は戦闘機5機分位になると試算された。

現実的ではない。

そこで、発想を変えて、人工靈魂まではいかない、スライムを変容させてコアとし、サポートに性能を振った人工知能を搭載させ、パワーアシスト機能を持ったスーツに、靈的アシストを合わせ待たせることにしたのだ。

そう、デモニカスーツに、自力で辿り着いちゃったのだ！

つまり、タルカジャ、スクカジャ、マカカジャが常時掛かり、万能以外に若干の耐性がある、アンドロイドに比べれば格は確かに落ちるが、十分すぎる怪物を開発したわけだ。

コアに悪魔を素材としたことからスーツ自体もLvが上がり、Lv20位まではサポートできるとの事。

ん、マリアさん達？

人工靈魂に成長限界はないって言ってたぜ？

スーツのアシストにより、10位上のLvの存在ともやり合えることが出来る、今の状況では神設計としか言えない性能。

動力源は、MAGバッテリーを分散配置し、補助としてMAG集積装置も搭載している。

生産性も、一日一体生産可能で、お値段も戦車1台分と格安である。え、億単位が安い訳ないだろ！、つて？

Lv30付近って、正直破壊力は戦術核兵器並みだからな？

それが戦車1台の値段でやり合えるかもしれないって格安だろ？

逆に言えば、ヤバイ。

こんなもん軽々しく世に出しちゃえば、糞メシアン共が嬉々として

「神から与えられし物」認定を勝手にして、活用しまくるのが目に見えるている。

詰まるところ、ウチだけでは絶対に手に負えない代物ってわけだ。そろそろ、腹を括らにやあならんか。

「親父、ちよつと話があるんだけど。」

日課の特訓に出ようとする親父を、玄関で呼び止めた。

「なんだ、的。急用じゃなければ、夜でもいいだろう?」

訝しげに、俺を見る親父。

「ああ、とても重要なことなんだ。これから変わるはずの世界について話がしたい。」

「お前、何を言ってる?」

俺の言葉に疑問の声を上げかけた親父だが、俺の眼を見て、頷いてくれた。

「分かった、書斎で聞こうか。」

「親父、この光景、可笑しいと思わないか?」

書斎の窓から異界を眺めながら、俺は言う。

「神秘が薄れたはずの現代で、こんな数と種類の悪魔がどうして現出してきたのか。そして落魄したとはいえ、仲魔ラム達のような高位な悪魔が顕現したのか。」

「む、そう、だな。慣れてしまっていたが、確かに可笑しな事態だな。」

親父も徐々に状況に馴染んでしまっているが、当初は驚愕していたのだ、大妖の出現に。

「俺はな、親父。あの死にかけたとき、見たんだ。世界の壁が壊れて、神話の時代に戻った地獄の光景を。」

「なに!？」

「最初は俺も信じられなかったさ。でも、焦燥感が消えなかったんだ。だから俺は、俺なりの準備をしてきた。なあ、親父。最近の悪魔の出現状況、知ってるだろ? 本当に、壁が、薄くなってきているんだよ…。」

「未来予知?、いや啓示なのか?…? だから、此処までうまく事が運べた?」

流星に、ここがゲームで知ったような世界で、転生してその知識で

動いてます、なんて言ったら正気を疑われかねないので、オカルトっぽく予知として知ったようにしたのだが、なまじ本当にそう言う能力者が居る世界なので、親父としても否定しきれないようだ。

「そして、カオス爺さん達がこの状況を食い止められるかもしれないものを作ってくれたんだ。でも、それは劇薬でもあつて、逆に世界の壁を壊しかねないんだよ…。正直、どうすればいいのか分からなくなつて…。」

ああ、そうだよ、中身は50過ぎたオッサンだけど、世界の危機の救い方なんかわかりやしない。

がむしやらにここまで来たけど、どうすりゃいいのか…!

ぎり、と奥歯を噛みしめて俯く俺の頭に、ぽん、と手を載せる、親父。

「的、正直私は、理解できたとは言えん。しかし、お前のこれまでの努力は知っている。信用するよ。それで、何が問題なんだ?」

ほっとした余り膝が砕けて暫く話すことが出来なかつたが、デモニカスツの話をする、親父もそのヤバさに絶句していた。

そりやそうだよな、気〇いに刃物どころか、核弾頭渡すことになるかもしれないんだから。

「流石に、私の手には余る。やはり、政府に話が出来る伝手が必要だな。」

やっぱり、そうなるか。

今までの貸しを一寸返してもらおうしかないな。

その前に、あの方にもこつち側に来てもらうか。

暴走するのが怖いし。

五島三佐は、目の前の光景が現実なのか、二度目を擦り、フルパワーで頬を抓り確認した。

現実だった。

「装備のことで話がある」、と、MACの事務所に呼び出され、真剣な顔の的から「今から向かうところは、他言無用をお願いします。…多分言つても信用されれないとは思いますが」と、トラポートで移動した

のであった。

そこは。

百鬼夜行。

ある程度の実力はあると自負する自分であっても、秒とは持たないであろう魔境がそこに広がっていた。

「ここが、ウチの異界です。」

戦慄しながらその地獄を見ていると、的がさらりと爆弾発言を投げ込んでくる。

「な……いや、この異常な異界があればこそ、これまでの装備類が開発できたのですね。しかし、何故本官に教えたのですか？」

その問いに、真剣な表情で的はこれまでの経緯を五島に話していた。

瀕死の際に、予知か啓示によりこの世界の終わりを見たこと。

それに対し、目覚めた悪魔召喚者^{デビルサマナー}としての力を使い準備を進めたこと。

異常にスムーズに事が進み、異界の規模がこれほど大きくなったこと。

「多分、世界の壁が薄くなっていることと無関係じゃないと思うんです、そして。」

ドドル、カオスと言う協力者を得て未覚醒者でも戦える手段を模索し、弱い覚醒者でも戦えるようにしてきたこと。

「今、ウチは世界の危機を救う事にも、逆に滅ぼす事にも使える装備を開発してしまいました。」

苦悩に満ちた表情で五島を見る、的。

「僕は……身近な人達を、延いては日本を護りたい。力を貸してくれませんか、五島三佐。」

響いた。

長年、護国の念と現実の狭間で怒りと、諦念とに苛悩まされていた五島の心に、それはもうものっ凄くぶっ刺さった。

がし、と、的の手を握る。

「的君、君の護国の念、この五島感服仕った！ぜひ、協力させて頂こう

！」

熱い思いをたぎらせて、年少の同志への協力を誓ったのであった。内容を聞いて盛大に顔を引き攣らせたのであるが。

「まずは、一歩か。」

応接室から出ていく五島三佐を見送りながら、独り言ちる。

五島三佐を引き入れるのは、当然リスクがある。

なんせ、カオスルートだからな。

でも、放っておいたら暴走するだろうし、どの道自分たちだけで出来ることは少ないのだから、色々飲み込みながら前に進むしかない。

そ

と、おユキさんの手が、俺の頬に添えられる。

深い菫色の瞳が、俺の眼を絡めとる。

「あたる様、あなたは一人ではありませんわ。私たちも共に居ります。分かち合い、支え合って乗り越えてまいりましょう。」

そう言っつて、花が開くように、包み込むように微笑んだ。

「おユキさん……！」

俺は、添えられた手を両手で握りしめ、徐々に二人の距離が縮まり……。

「小僧、清磨めが、物凄い事をやりおったぞ！」

「なんか恨みでもあるんか、爺い……!!!」

第24話：盗んだバイクで走り出す

清麿、こいつも大概な天才だった。
シヨップ機能を作り上げたのだ。

異界産の物は、MAGで構成されていることに注目し、それを悪魔保管庫の技術を応用してソースコードに変換して、インターネットで取引できるようにしたのだ。

対価はマツカ。

こいつもMAGで出来ているので、それと交換する形で商品が相手の前に出現し、マツカはこっちに来るという寸法だ。

もう気付いたと思うが、悪魔もMAGで構成された情報体。

なので、悪魔も取引できる理屈となる。

清麿は更に、籤機能まで付けていた。

「いや、籤引きって何かワクワクしません？」

と、本人は宣っていたが、いや、この時代にガチャの実装って、早すぎだろ…。

魔王争奪戦については、テイオとかキヨンチヨメとかウマゴンとか言う魔物と組んで勝ち進んでいるらしい。

その最中に開発して見せたのだから、どんな頭してんだ、ほんと。

いや、スゲエけどよ。

頭痛案件増えちゃったよ。

ここはもう、纏めてぶん投げるか！

政治家の知り合いと言ったら、この間依頼してきた通商産業大臣しかいない。

石油と鉱山の関係から、なんとかアポイントメントを取り、会談を設定してもらった。

落ち着かない。

前世を含んでも、こんなに高級そうな掛け軸やら皿やらが飾られた和室に来たことがない。

今、赤坂にある料亭の一室で、俺と五島三佐は大臣を待っている。

五島三佐は、流石に目立たないようにスーツ姿であるが、はち切れ

んばかりの筋肉が存在を誇示しているんで、スーツの意味あったのかなあ？

と、襖が開き、大臣が入ってくる。

「やあ、待たせたね。二人揃って何の用かな？」

にこやかな、それでいて全く笑っていない笑顔で席に座る。

「はい、大臣のお時間を取らせるのもなんですから、端的に言わせて頂きます。」

俺は、五島三佐に説明したことを大臣に話した。

最後にシヨップの件を付け加えた時には、五島三佐が、え、と言う顔をしてたけど。

大臣はその間煙草を燻らせて、表情を変えずに聞いていた（禁煙・嫌煙なんてこの頃は一般的でない）。

話し終わると、大臣は煙草を揉み消し、五島三佐の方を向いた。

「五島君、今の話は本当かね？」

「確認する術はありませんが、世界の状況を見るに可能性は高いかと。」

ふむ、と少し考え込む、大臣。

「デモニカスーツって奴は、そんなにヤバい代物なのか？」

「大臣に分かり易く言わせて頂くと、鉄腕アトム軍団が攻めてくる、と言う感じでありますな。」

「!、…そいつは、怖いな。」

初めて表情を崩すと、もう一本煙草を取り出し、火を点けて深々と吸い込む。

ふうう、と肺の中の紫煙を吐き出した後、俺の方を向いた。

「それで、諸星君？、君は何がしたいのかな。」

値踏みような、冷徹な眼差し。

「世界を救いたいとでもいうのかな？」

「いいえ、世界なんて知りません。日本が無事ならどうでもいいです。」

世界なんて、んなもん背負えるか。

日本でも持て余しとるのに。

ニヤリ、と大臣が笑った。

「合格だ。世界を救うなんて戯言抜かしてたら、帰らせて貰ったぜ。」

パンパン、と手を鳴らして中居さんと呼ぶ。

「後は、美味しい酒でも食らいながら話をしようじゃねえか。おっと、諸星君はジュースで済まんがね。」

五島三佐から献杯を受けた大臣は、くいつと干しながら話を切り出した。

「私はね、政治家なら皆考えてるだろうが、総理の椅子を狙つとる。其の為には、日本と言う国が存続しとかにやあ、どうしようもない。」

五島三佐への返杯をしながら、嘆息する。

「まだ政府内で情報を留めてるんだが、アフリカ、想像以上に状況が悪い。既に無政府状態になった国が出てきている。」

「な……、原因をお尋ねしても?」

行き成り出てきた重要情報に、僅かに狼狽える、五島三佐。

「色々だな。民族問題、政治の腐敗、貧困問題、メシア教のテロ、そして、悪魔。」

また一杯干す、大臣。

「政府内でもな、悪魔の出現の日常化は喫緊の課題として挙げられてたんだ。しかし、良い案も無く正直手詰まりだったんだがな。」

そこで、嬉しそうに俺を向く。

「諸星君の話で、ちいと勝ち筋が見えてきた。」

アテのナッツをバリ、と噛み砕く、大臣。

「まず、シヨップとやらは国が音頭を取らせてもらう。」

え、と思った瞬間、ば、と手を開いて突き出した。

「不満は分かる。だがなあ、今でも諸星君の所は勝ち過ぎている。ここらで国に花を持たせた、と言うのを見せとかんと、排斥されるぞ?」なるほど。

「国に逆らうつもりはない、と、表明するわけですね?」

「話が早いのは良いねえ。まあ、それでも言うやつは言うだろうがな。」

それで、こいつはODAの通信事業支援として公益団体を一つ立ち上

げる。そして、異界産の霊薬や装備をショップを通じて弱小国家に融通する。なに、通信支援にや違いないからな。もちろん、仕入は便宜そちらにお任せするを図らせて頂くよ。悪魔関連に関しては、バージョン世界が変わるアップ待ちだな。」

上手え。

弱小国家への支援と見せかけて、ギリギリまで悪魔を間引かせてG Pの上昇を抑え、いざ世界の壁が壊れたら堂々と悪魔を派遣して、更に壁とするつもりだ。

そして、霞が関からは天下り先を増やしたと感謝されるわけか。

「んでだ、デモニカスーツの件だが…。」

にやり、と悪戯小僧のような笑みを浮かべた。

「でかい花火を、打ち上げようや。」

「ふへえくく。」

溜息をつけてトボトボと家から友引高校へ歩く。

あれが、老獺って奴か。

去り際に、「私は、自分に利を齎す者は裏切らんよ」って、言ってたけど、明らかに釘を刺してたよな、裏切るなよ、と。

何かしてやられた感が半端ないなあ。

「よう、旦那。景気悪い顔してんじやねえか。」

ドルン、と言う腹に響くエキゾーストサウンドと共に声を掛けられた。

振り返ると、車輪が燃え盛るチョッパーに跨った弁天様。

これ、どうしたかって？

この間、歌舞伎町に出没するヘルズエンジェルの除霊に向かった時、弁天様が、

「良いもんに跨ってるじやねえか、寄越しな！」

って言って、鎖をヘルズエンジェルの首に巻き付けて引きずり落とし、

「はっはー！ー！！、ご機嫌だぜ！！！」

って走り去っちゃったんだよね。

かくーん、と顎が落ちたヘルズエンジェルに、

「…逝つとく？」

つて聞いたら、コクリと頷いたのが、哀れを誘ったぜ…。

「湿気た面してんじゃねえよ、乗りな。」

く、と顎で後ろを示す、弁天様。

え、良いの？

弁天様の後ろに跨り、恐る恐る腰に手を回すと、柔らかくて、良い匂いがして…。

「しつかり捕まつとけよ！」

え、うつぎやあ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~

!!!!!!

し、死ぬかと思つた。

潮騒の響く砂浜で、俺は四つん這いになって乱れた呼吸を整えていた。

「ちつたあ気が晴れたかい。」

その声に顔を上げると、澄んだ青い海を背景に、ちよつと顔を背けた弁天様。

「あたいは、がさつで料理とかも出来ないし、旦那の仕事を手伝う事は出来ねえけど、気晴らしにはいつでも付き合つてやるからな。」

少し朱が挿した頬が、蒼穹に映えて。

「弁天様…。」

半身を起こして、弁天様に手を差し伸ばし…。

「危ない！あたる!!」

「おぉ!!」

横合いから飛んできた錯乱坊ミサイルチェリに、横回転をしながら吹っ飛び。

「海が好き~~~~~!!」

「あがあ!!」

ビッグウェーブに乗った竜之介ちゃんの親父のサーフボードに激突した。

「ああ！やはり運命を変える事は出来なんだか。南無阿弥陀仏。」

「貴様が、捻じ曲げたんだろがあ~~~~~!!!!!!」

キラ☆ン

第25話：バビロン計画

官邸で、重大発表があるとの知らせに、各局が集まっていた。バブル崩壊後の不況に加えて、世界各地で起こる紛争。

まこと密やかに囁かれる、悪魔の存在と、世界の終わり。

そんな先行きの見えない世相に、報道機関の人間といえど不安を隠せていない。

そこに、官房長官が演台に上がった。

瞬くフラッシュ。

「それでは、内閣官房からの緊急会見を始めます。官房長官、宜しくお願ひします。」

「皆様、開始させていただきます。今回の会見は、東京湾再開発計画についてです。」

会場がどよめく。

この不況下で東京湾の再開発など、やっている暇があるのか？

記者らは、その正義感によって、憤然と質問の手を挙げていった。

「舞日新聞の林です。再開発と仰いましたが、何を目標に開発するのか説明して下さい。」

「皆様ご存じの通り、わが国で新エネルギーが発見されました。ですが、市場の要求に応えられるだけの生産量が達成されていない。そこで、新たに開発する地に、それらを集積してより効率的に生産を行わせるのが目的となります。」

この返答に、各報道機関が鼻白む。

最近の情勢から、民衆はエネルギー関連の話題に敏感になっており、下手に突っ込むと、政府より自分達に批判の鋒が向きかねないからだ。

「明朝新聞の金木です。エネルギー政策が重要なのはその通りですが、埋め立てに必要とされる建機の燃料の確保の用途は立っているのでしょうか？」

真剣な顔を保ちながら、内心彼は嘲笑っていた。

政府が発信していないが、アフリカは今、混沌の坩堝である、と、欧

州の友人記者からのリークがあつたのだ。

そんな状況では、燃料重油の定期的な確保など望むべくもなく、ともに建機を運用させるとなると、国民に負担をかける事態になるはずである。

昏い期待に燃える彼の眼に、官房長官の明るい笑顔が、捉えられた。「皆様の疑問は当然の事と考えます。その疑問に答えるものを、用意しておりますので、玄関前までお進み下さい。」

その言葉に、一斉に玄関に殺到する、報道陣。

すると、官邸の玄関に何時の間にか、一台のトレーラーが停車していた。

官邸面が開いてスロープ状になるのに合わせて、残りが後ろに倒れていく。

中には。

人間を巨大化させたような金属の塊が横たわっていた。

ぎしり。

トレーラーの荷台を軋ませて、それが、まるで人間の様な滑らかな動作で立ち上がる。

そして、5mは超えようかと言う巨体が、荷台からの段差を問題なく降りて見せる。

どよめく、取材陣。

「篠原重工が開発した、MAGバッテリーにより動く、有人多目的労働機械、LABORです。」

まあ、こんなもん出したら、そら注目行くわな。

フラッシュで埋め尽くされる画面を見ながら、あの料亭の夜を思い出す。

「要はな、相手が欲する重要そうな物を別に用意してやるのさ。オカルト的要素を極力排除して、日本以外でも製造可能で尚且つ悪魔に対抗可能なやつをな。」

「そんな都合がいいもの…。」

俺が大臣の言葉に反論すると、にや、と笑って続ける。

「いいかい、お前さんたちのコンセプトは、個人が運用できることを目指してる。だが、企業や国が運用すると考えたら、どうだい？」

あ、そうか。

人体サイズに色々詰め込もうとするから、無理が来る。

逆にサイズを大きくしていいなら、余裕が出来るよな。

俺は大臣に断り、カオスに電話した。

「なんじゃ、そんな事か。出来るぞ。」

あつさりと返ってきて、

「はい？」

と、間抜けな返事をしてしまったのは、俺のせいでは無いと思う。

カオス曰く、オカルトを使用しなければ、材料強度や発動機の関係でサイズの限界はあるが、人間が操縦することで動かす機体は直ぐにでも用意できると言う。

ヨーロッパの魔王、半端ねえな。

電話を切って大臣に告げると、ぱん、と手を打ち合わせた。

「いいねえ。そいつを使って、東京湾に人工島を造成させる。人工島って奴は、入り口が限られていて、防諜に向いている。そこに、MAGバッテリーなんかのオカルト関連工場を集約して、」

そこで一旦言葉を切ると、俺の眼を見つめる。

「異界の入り口もそこに移す。」

…なるほどね。

大臣も分かっているだろうけど、異界の入り口をそこに移したからと言って、政府が俺たちを管理出来るかと言ったら、それは無理だ。

でも、政府の指示に従うという姿勢があると言うだけで、安心する勢力は、一定数居るってことだな。

「…そのお話、お受けします。ですが、無理に言う事を聞かせようとした時には。」

一応、釘を刺すと、大臣はほっとした顔をして、続けた。

「分かっている。私もドラゴンの尾を踏むつもりは無いさね。あくまでも防諜が目的だよ。本命はそこで、秘密裏に製作してもらう。」

そしてもう一杯盃を干すと、両膝に手を勢いよく叩き付けて、宣言

した。

「さて、世界相手にイカサマ勝負と行こうじゃないか！」

そんなことを思い出しながら画面を見てみると、丁度官房長官の横にモニターが設置され、白と黒のツートンカラーに塗り分けられたLABORの予想完成図が映し出された。

「LABORを用いた犯罪が想定されていますので、新たに警察用LABOR、PATLABORの部隊を新設して備えます。また、自衛隊にも自衛隊仕様が配備される予定です。」

そう、LABORは、銃器を扱える。

未覚醒者が撃った場合、戦艦レベルの大砲であっても悪魔は屁とも思わないが、一たび覚醒者が撃つとなると話が違い、銃の威力に従って悪魔へのダメージも上がる。

これは重要？事項なのだが、LABORの視覚センサーは、少しのオカルト素材に部品を変えることで、悪魔を認識できる。

つまり、戦車サイズの弾を悪魔に打ち込めるのだ。

おまけに装甲を、異界由来素材との合金製に換装すれば、サバイバリテイも向上する。

これらの？情報は、米軍に秘密裏に提供され、何故か世界中に広まっているらしい。

最近、公安とCIAとの通信量が増えたらしいよ（棒）。

突然この衝撃的な発表を行った篠原重工は、社長が大臣の後援会長を務めている。

凄い偶然ってあるもんだね（目逸らし）。

あ、今篠原重工の株、ストップ高のテロップが流れた。まずもってこの機体を見捨てる国家は居ない。

今齎されつつある危機に、現実的に対応できる可能性が提示されたのだから。

更に憎い所は、重油バージョンも用意されているところだ。

金あるところは、まず買うよね。

無い所？

そこに円借款と言うものがあるじゃろ？

にしても、大臣のオツサン、自分が儲けたのは当然として、政界、官僚、財界、延いては米国まで、騙しながら恩を売りつけやがった。

ソファに背中を投げ出して、天井を見上げる。

「俺もまだまだだよな。」

その視界に、ひよい、とクラマ様が入り込んでくる。

「ふむ、最近の婿殿は、頑張っておると思うぞ？」

珍しくお褒めの言葉を言ったと思うと、その顔が妖艶な笑みを浮かべる。

「頑張っておる婿殿には、褒美が必要よな。」

少しずつ近づいてくる、顔。

クラマ様の艶やかな唇が、俺の口に…。

「浮気は許さないっちやよ〜!!」

「あばばばばばばばばば!!」

「なにをしさらすか、ラム！」

「ダーリンはウチの物だっちや！」

「あらまあ、あたるさんは私が管理いたしますわ。」

「ばばばば馬鹿野郎、旦那は、あたいのもんだ！」

「なんか、思ってた展開ハイレムと違う…!」

ギャアギャアと喚きあう声を背に、俯せに床を舐めていた俺は、ようよう顔を上げると、目の前に、錯乱坊チエリ。

「宿命さだめじゃ。」

チーン

がくり。

閑話2

私は、零細退魔組織の家系に生まれた。

私からすると、明治の頃から続く老舗なんだけど、皇紀2600年オーバーする日本では、殻の取れないひよつ子らしい。

確かに、所長の悪魔憑きに全力寄りかかりで、歴史ある大家からすると、ミジンコ扱いなんだよね…。

と、思っていた時期がありました。

所長の息子、鬼才でした。

悪魔召喚者に目覚めたと思えば、国崩し級の悪魔を呼び出すし。

ウチの管理異界を、大魔界化するし。

才能の格差って残酷なんだ、って、確認させられたのと、生涯の相棒に合わせてくれた、ごちやませの感情がある。

彼が大改造した異界に潜った瞬間、「あ、死んだ」と、魂から感じた。

イツポンダタラが、整列して、

「お帰りなさいませー！」

って頭下げてるの、想像できる？

異界のボスが、

「諸星。貴様あ~~~~~！」

って、日本を沈没させかねない霊力で切りかかって、それを「ふっさけるなあ~~~~!!!!」

って、真剣白刃取りをする人間がいるって、信じられる!???

いや、とつても良い子だよ？

女の子の誘惑には、とつても弱いけどね。

彼は、止まることは知らないとかばかりに突き進んでいる。

異界は、無い属性は、無いと、言う位に悪魔が充実した。

だからこそ、怖い。

彼が、この先に見越しているものが何なのか。

知りたいけど、知りたくない。

そんな複雑な感情で過ごしている。

とは言え、この異界、過ごしやすいんだよね〜。

空気は澄んでるし、食べ物も美味しいし、温泉は気持ちいいし、
ジャックランタン、ジャックフロスト、ピクシー
ラン、太やフロスやリンちゃんも遊び放題だし。(注1)

でも、ホント私の霊力が(強制的に)上がってから鬱陶しかったんだよね。

道を歩けば攫われようとするし(覚醒レベル上がってるので相手にならない)、アパートには連日「神の下へ身を捧げましょう!」と一神教を名乗る目が逝っちゃった人が押し掛けるし。

警察には注意してもらったけど、日替わりで人が変わるから、注意以上の事は出来ないと言われちゃった(この当時ストーカー規制法は成立してない)。

まともに日常が送れないし、両親はともに中学生の頃除霊で死んじゃってたんで、思い切って異界に出来た学校の用務員室に引き籠ったんだ。

今は気楽に過ごせて快適、快適!

結構給料上がったんで、欲しい服とか本とか、あの子たちのお菓子とかはネット注文で済ませてる(注2)。

MAC事務所で受け取ってもらって、それをイナバシロウサギ便で届けてもらっているんだ。

家電がまともに動かないんで、掃除がめんどくさい位かな?

洗濯は福利厚生で事務所に洗濯機が設置されてるから、問題ないし。

冷蔵庫?

フロスがいるから必要ないよ?

他の所員さんたちも異界に引っ越してくる人が増えてきて、賑やかになってきている。

こんな生活も悪くないよね。

後に。

的君から「世界の終わり」について聞かされて白目を剥いた私たちであった。

第26話：新世紀開始？

今、世界の軍隊ではLABORへのパラダイムシフトが起きつつある。

何しろ、悪魔と相対するのに、戦車では相性が悪すぎる。

砲塔を回す速度より、相手の動きの方が早い。

おまけに悪魔が出現する場所に、戦車は入れない場合が多い。

だがLABORであれば、戦車砲サイズのマシンガンやショットガンで面制圧射撃が可能になるし、戦車に比べて場所を選ばない。

採用しない理由がない。

米英独仏は、多種多様な企業がライセンス生産を始めている。

中でもシャフトエンタープライズ社が頭一つ抜きんでいるようだ。

お隣の国は、独自開発したと謳うLABORを発表した。

なんで1か月もしないのに新機軸の機械が作れるんですかね？

ただし、頗る評判が悪い。

姿勢制御ソフトの出来が宜しくないのだ。

其の為、操縦が物凄く煩雑になり、射手と操縦者の複座式となっている。

まあ、日本の姿勢制御ソフトは、清磨製だからな。

キッチンとブラックボックス化されており、無理に開けようとした場合プログラムはデリートされる。

ああ、買った傍から開けて、謝罪と賠償を要求してきた国もあるけどね。

今、このソフトを巡って水面下の暗闘が繰り広げられているとは、後藤さん情報。

爆釣、爆釣とほくそ笑んでいたね。

因みに、アフリカ諸国はやっすいお隣製を我慢して購入するか、円借款で日本製を買うか、らしい。

日本国内の工場は、フル稼働で嬉しい悲鳴を上げている。

しかし、頭が痛い情報だが、メシア教会製のLABORも出現している。

こちらはくそ天使によるオカルト技術により、直接覚醒者の脳にコードをぶち込んで機体の制御を行うため、他のLABORより挙動がスムーズだそうだ。

レンズからの情報も視神経に接続されているってよ。

何ともグロイエヴァ方式だな。

カオス曰く、「こんな無茶な接続なんかしたら1回の出撃で脳が焼き切れるわい」、だそうで、どうやら操縦者は使い捨てらしい。

まあ、メシアンなら喜んで身を捧げるんだろうけどな。

あと、機体はシャフト製品の癖が見られるとの事だが、シャフト側は公式には否定している。

何でかアフリカのテロ組織にもLABORが普及してきていて、そっちはお隣製が多い。

勿論、国家の関与は否定しているよ。

ロシア連邦は、まだごたごた続きでLABORの配備は遅れがち。ただ、面積が広くて人口集積地が少ないため相対的に悪魔被害は少ない。

どこもLABORと言う新機軸に群がっている。

其の隙を縫って、ウチの異界では毎日五島陸将（昇進しました）の秘匿部隊がデモニカスーツのブラッシューアップに励んでいる。

やっぱり、現場の意見は重要だからね。

五島陸将、張り切りまくってるから、何か、物凄く進化しそうで怖いんですけど。

東京湾人工島計画、通称「バビロン計画」は、日本国内では高い注目があるけど、世界的に見てそこまでではない。

世界の耳目がLABORに集まっているからだ。

それを良いことに、カオス監修の霊的防御を最初から組み込んだ埋め立てを行っている。

無造作に基礎として投げ入れている土砂は、ウチの異界産の物だし、綿密な計算で埋め込まれる魔鉱石は、魔術陣を描くように設計されている。

効果は、少量ずつMAGを貯め、起動キーにより島の上空にマハム

ドバリオンを発動できると言うものだ。

まあ、クソ天使対策だな。

あ、建物内に被害が出ないようにしてあるよ、勿論。

現実的な侵入者対策としては、時代先取りの監視カメラによる警備システムを構築する計画だ。

勿論、悪魔も認識出来るぞ。

土地の造成が済んだら、そこで異界の入り口を移す。

最初は工事関係の建物に偽装して、後々は、ウチが主体の警備会社を設立して、その建屋の中に設置される予定だ。

そんな日々を送っていると、珍しい来訪者が、家に来た。

「…邪魔をする、諸星。」

苦虫を、小単位で噛み締めている表情で、玄関に佇む。面堂。

「…お、ほほほほ……。」

何時もの高笑いも力ない了子ちゃん。

「ん、どうしたん二人そろって、珍しいな？」

「…貴様に頭を下げるのは業腹だが、我々の関係者が迷惑を掛けることになった。」

面堂が、頭を下げながら重い口を開く。

うえ!?

こいつが頭を下げるなんて、槍でも降ってこんよな？

「実はですね、あたる様。お父様とお母様が顕現なさいまして…。」

………何て？

「了子ちゃん、俺、耳が遠くなったのかな？ご両親が顕現したって言わなかった？」

ダラダラと汗を流しながら聞き返す、俺。

いや、だって、この二人の両親だったら、ねえ!!!

「残念だが、本当だ、諸星。父神たる伊弉諾神と母神である伊弉冉神が、今異界に顕現されている。」

うそくそくん!!

この二柱と一緒に居たら、新世界創造始まるやんけ!

慌てて面堂邸に駆けつけると、どこの米国の富豪宅だよって位に

ゴージャスになっていた。

玄関を開けると、ダンスでも踊れるんじゃないかって空間に、両側から二階に上がれる少し弧を描いた階段と、映画の中でしか見ないような空間の中心に、やや歳はいつているものの美男美女のカップルが佇んでいた。

「やあ、すまないね。本来ならこちらから出向くものだが、いきなり顔を出すとびっくりするだろうから終太郎に託を頼んだんだよ。」

「……。」

伊弉諾神がそう話す横で、伊弉冉神は、口元を扇子で隠しながら隣の執事の格好をしたイッポンダタラに何事か呟く。

「奥様は、子供たちが世話になった、と仰っておられます。」

「はは、ははは……。あの、現世との繋がりが薄くなつてたはずのお二方がどうして顕現されたので？」

背中に冷や汗を掻きながら俺が伊弉諾神に聞くと、おや、と怪訝な顔をされた。

「それは、終太郎の契約者である君のお蔭だよ。」

え？

ぼかんとした俺に、伊弉諾神は続ける。

「霊的な儀式をしながら国生みをしているじゃないかね。それで我々に繋がったんだよ。」

…あ。

東京湾再開発!!

言われてみれば、あれ、国生みじゃん!!!

あまりの事に、がくり、と膝をついた俺に、

「まあ、そうは言っても現世への繋がりはまだまだ薄いんで、ホンの欠片しか来れていない。今の我々では新世界創造国生みなんて事は無理なので安心して欲しい。」

と、告げる伊弉諾神。

「……。」

「奥様は久しぶりに顕現できたので夫と共に現世を楽しませていただく、と仰っています。」

いや、今は、って何時か出来るかもしれないですよね!?

なんで終末を軟着陸しようとしているのに、それを越えた世界転換ネタ抱えちゃってんの!!?

「こんな生活、もういやじゃあ~~~~~!!!」

最終話：神代

LABORの登場により、世界は混沌としながらもギリギリ対応できている。

少なくとも欧州は陥落しておらず、南米はゲリラの嵐だが、最低限の態は為している。

お隣の大国は、性能は悪いながら一応使えるLABORのアフリカへの輸出で糊口をしのいでいる。

米国は、これぞPOWER IS JUSTICE、なLABORを送り出して国内とカナダ、中南米辺りの支援に乗り出している。

スターク社が小型化に挑み始めもしている。

ロシア連邦もグダグダながら何とか連携して悪魔対策をしている。アフリカは蟲毒の壺となっているが、主要な国はまだ国体を保っている。

メシア教に乗っ取られた国もあるのだが、やはり悪魔への対抗手段がある、と言う事実は大きい。

少しずつ、世界は、秩序を取り戻し始めていく。だが。

悪魔への認識も、日増しに広まっていき。

GPは少しずつ、上昇していき。

LABOR登場から、季節が三つ程廻った時。

世界の壁が、割れた。

欧州では、トランペッターが高らかに終末の音色を吹き鳴らし。

中東では古代バビロニアの姦婦が呪詛を振りまき。

アフリカでは、終末の四騎士が闊歩し。

インドではアバドンが蝗の大群で全てを食らいつくし。

ロシアでは、チエルノボーグが死を撒き散らし。

中国では、四凶が大地を荒らし。

南米では、テスカトリポカが世界を破滅する風を吹かせ。

北米では、クトゥルーがルルイエを浮上させ。

日本でも、白面の者が目覚めた。

空を覆う、無数の婢妖の群れ。

全ての人が、それを見る、見えてしまう。

異質な、恐怖しか感じないそれが大衆に襲い掛かろうとしたとき。

「第1小隊、撃^ててー！」

パパパ、と自衛隊が放つ小銃の弾に消滅していく、婢妖。

更に、

「ハマライト、照射あ〜〜！」

「照射！」

「観測班、報告！」

「は！、照射域消滅、効果大！」

大型の婢妖に対しては。

「野明、右の群れにライオット！」

「分かった、遊馬！行くよ、アルフォンス！」

「ぬおおおおお!!」

「こらあ、太田、無駄弾を撃つんじゃない!!」

霊装仕様に換装されたP A T L A B O Rが食い止める。

そして。

この機会を狙ってメシア教が乾坤一擲で召喚したドミニオンと、パワーの群れには。

「むうん！」

「ぎいやああああ!!!」

「ふむ、やはり天使にはムドが付与された刀が良く効く！」

「おのれえ、邪教の徒が!!!」

裸禪の五島陸将に指揮されたデモニカ部隊が、対処し。

「絶頂除霊く〜く!!!」

「悪魔の化身が！、ぬほおおお!!!」

天使絶対随天使するマン
天使特効のライドウが縦横無尽に駆ける。

全ては、潮ととらを、白面の者に届かせるため。

そして、既にこの世を去った者も。

「鏢さん…、皆…!!」

あの世の門から還り来て、潮の背中を押す。
だが、それでも。

白面の者への道は、遠い。

群がり寄せる、婢妖。

「気合い入れて行けよ、とら!」

「ふん、誰に物を言ってると思ってるやがる!」

前を向き、獣の槍に、己を注ぎ込み!

視界を白く染める、雷撃の、嵐。

そして、撃ち漏らしを貫く、独鈷。

「的の兄ちゃん、流の兄ちゃん!」

「けえ、鬼っ娘かい!!」

「言ったら、道は開いてやるってな。」

「相変わらず、的の旦那は底が見えねえなあ。よう、潮、露払いは任せな。」

「あんまりのろまだと、うちらが貰っちゃうつちやよ?」

「ちい!おめえとは、後で決着つけてやるからな!」

「おおおおおおお!!!」

駆ける、潮と、とら。

「…ま、実際のところラムに吊り下げられてる俺らだと、邪魔にしかならんだらうけどな。」

「…言うなよ、的の旦那。」

斯くして、白面の者は退治された。

日本を支える柱に、大きな傷跡を残して。

それを埋めるために、身を捧げようとする、怪異の群れ。

人間の為ではない、と言うが、中継されていたその光景は、人々の意識に影響する事、大きく。

「おおっと（棒）、丁度、良い伝手があるんだよな。」

いきなりそう言いだした、日本、いや世界でも最高クラスの

デビルサマナー
悪魔召喚者は、二柱の悪魔を呼び出した。

「天逆鋒」

二柱がそう唱えると、中空に鋒が浮かび、白面の者が抜けて空いた穴を掻き混ぜて、新たな土地で、埋めた。

「…なあ、旦那、もしかして、あの二柱…。」

常に飄々とした流にしては珍しく、脂汗を流しながら的に聞いてくる。

「極秘事項だ。」

つ、と目を反らして言う的に、あ、これアカン奴や、と中継を見ていた全員が思ったのであった。

懐かしい、夢を見ていた。

開けるのも億劫な瞼を引き上げて、これまた丸太でもついているんじゃないかって位重い、右手を上げる。

枯れ木のような、皺だらけの、手。

あれから、長い刻が過ぎた。

あの、神世紀が始まった後、ワシは、カオス爺と共にGHOST SWEEPER協会の設立に奔走した。

その最中、追い詰められ、邪悪認定されたクソ天使共による、南極でのシュバルツバースを用いた、世界転覆、神魔戦争。

美神、忠夫らと奮戦したのは、昨日のように思い出せる。

だが。

「五島さんも、清磨も、潮も、忠夫も、流も、皆みんな、逝ってしまってたな…。」

そう、ワシは魂の霊格が、転生やらなんやらで大幅に上がったことにより、人より老化が緩やかになった。

何人も、それこそ、子や、孫も見送ってきた。
しかし、そろそろ、ワシの番のようだな。

「ダーリン。」

そ、つとその手が握られた。

ラム、お前は変わらず、美しいな。

「旦那。」

弁天、お前さんにその表情は似合わねえよ。

「あたるさん。」

おユキ、良くワシを支えてくれた。

「婿殿。」

クラマ、お前の叱咤激励は、効いたよ。

「ちと、疲れたわ。カオスの爺さんに、先に逝つとくつて伝えてくれや。」

この日、大英雄が、逝った。

「ぬわあああああああああ!!!!」

「ダーリンの魂は、ウチのものだつちや!」

「ふぎけんな!、旦那の魂はあたいのもんだ!」

「あたる様の魂は、私がしっかりと管理いたしますわ。」

「婿殿は、わらわが頂く!」

「ふぎけるな!俺はまだ見ぬ美女に会いに、転生するんじやあゝゝゝ!」

「「「浮気は許さない（っちや）（ぜ）（ですわ）（のじや）（!!!）」」」

「全く、相も変らぬのう、やつらは。」

「ちいっとも進歩しとらんのう。」

「あたる君にも困ったものね。」

「まあ、あれが彼らの在り方と言いますか…。」

「こんな（死後の）生活、いやじゃあああああ!!!」

「宿命^{さだめ}じゃ。」

Fin!